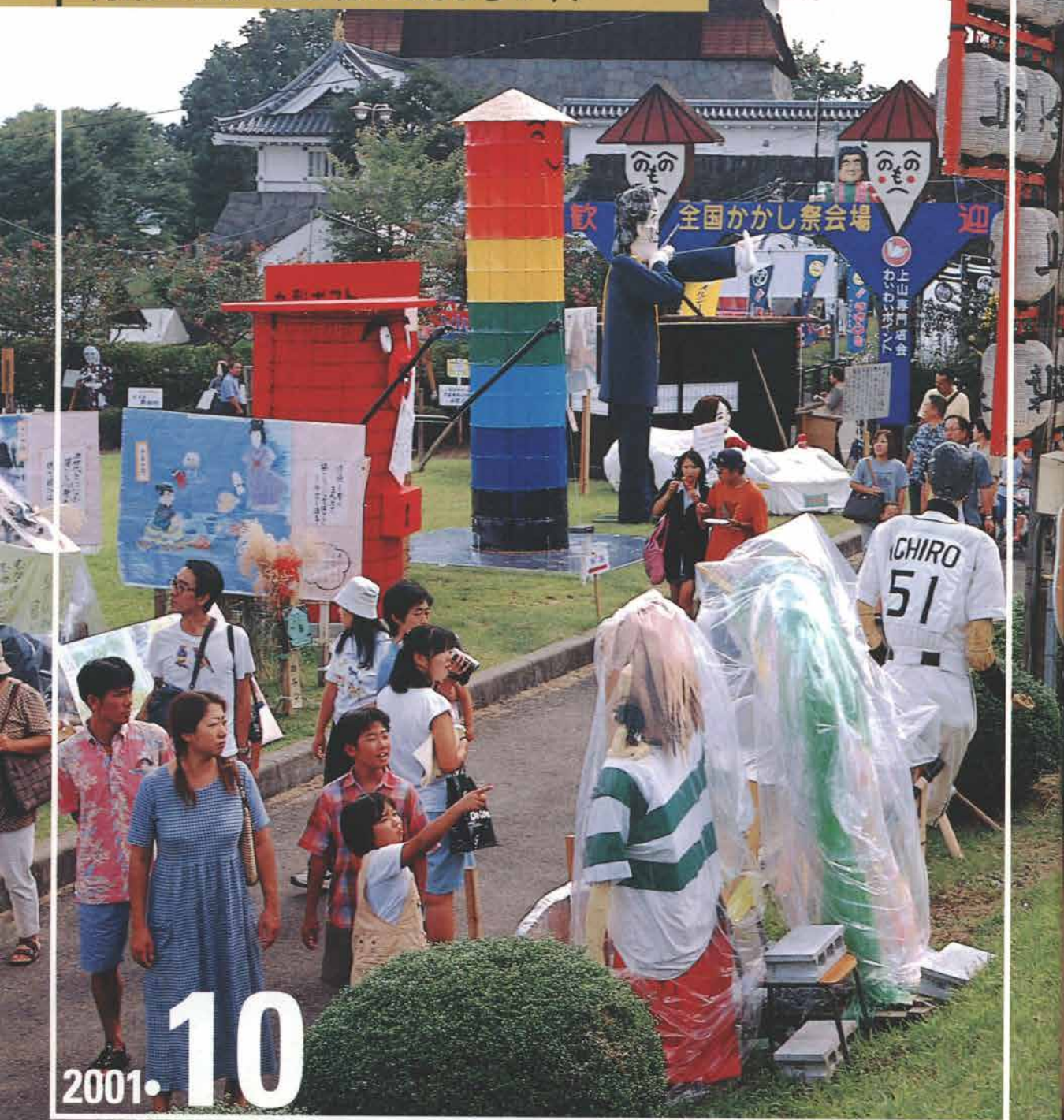


明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：動物・生き物によるまちづくり



特集

動物・生き物によるまちづくり

目次

生き物によるまちづくりは個性的に	生源寺真一（東京大学大学院教授）	4
様々なイベントでタンチョウ売り込む	北海道鶴居村・佐藤大輔	8
ふるさと創生資金でなまずの里づくり	青森県福地村・坂本康浩	10
メダカを保全し、豊かな自然環境を	神奈川県小田原市・小澤良明	12
絶滅危機のトキ、中国の協力で18羽に	新潟県新穂村・本間権市	14
全国に先駆けウミガメ保護条例制定	三重県紀宝町・西村政美	16
わが町のホタルは日本一	滋賀県山東町・中川澄子	18
自然を生かして昆虫王国建設	山口県むつみ村・山本英昭	20
闘牛のまちイメージ維持に腐心	愛媛県宇和島市・神應幸男	28
生活と自然を大切にするムツゴロウ王国	佐賀県芦刈町・水田常久	30
オンリーワンのまちづくり	伊藤一長（長崎市長）	3
住民参画型行政の実践	内海英一（鳥取県企画部長）	22
小泉八雲も愛したふるさとの海	原田誠治（静岡新聞社常務取締役）	27
平成14年度地方行政財政重点施策について	総務省自治行政局自治政策課	32
奈良県立万葉文化館がオープン	奈良県・藤田和弘	35
縄文遺跡を生かしてフェスタ開催	北海道伊達市・大島直行	38
全国たんば選手権大会を開催	熊本県産山村・吉野文夫	39
都市内物流インフラ整備のあり方に関する調査研究		36
すかんぼの会	石川県志雄町	40
寒九のトロッコの里食の研究会	新潟県川西町	42
全国地域リーダー養成塾・合宿研修		44
地域だより／センター通信		45・46
動物・生き物によるまちづくり		23
都道府県漫遊／手前みそですが		47・48

表紙●全国かかし祭
（山形県上山市）

実りの秋となり、これを祝うイベントが各地で行われている。米どころ、山形では「全国かかし祭」が九月八日から十六日まで上山市の月岡公園で開かれた。かかしは、豊作を守護する田の



神として古くからあがめられてきた。上山の場合、地元の高校生が学園祭に出展したのがルーツ。今年で三十一回目。新潟、長野、茨城県からも出品があり、総数は二百四十一体。伝統のワラ製のほか、古紙を使ったものも。

作品はアニメや映画の主人公、環境、リサイクルを題材としたものなどさまざま。「最近では世相を反映したものが目立つ」（梅津栄治・市観光協会事務局長）。

最も多かったのは小泉首相を扱ったもので十一体。バットの代わりにカマを持ったイチロー選手の前では、子供がバツティングフォームをまねる光景も見られた。

●ペン!!やなぎ ●カメラ!!小形又男

動物・生き物
による
まちづくり

動物と生き物。ペットとして家庭で飼われる愛がん、多くの観客に楽しんでもらうためのショーを演じたり、はたまた食用として育てられるものなどさまざま。いずれもわれわれと大なり小なりのかかわりを持つ。地元で生息するものをテーマにしたり、ないないづくしの中で他の自治体を参考にしながら元祖をしのぐまちづくりに取り組んでいるところもある。今回はそんな事例を紹介してみたい。



タンチョウ

の村＝北海道鶴居村
千円札の図柄にもなったタンチョウ。
えさがなくなる冬場には給じ場に数多く飛来する。



闘牛

大会＝愛媛県宇和島市
明治初期から始まり、中には1'を超す牛同士が
角を突く。2時間以上の熱戦もある。

ムツゴロウ

王国＝佐賀県芦刈町

有明海干潟の愛きょう者。体長は20cm。
行動範囲は自分の穴からわずかに1mと遠出はしない。



ウミガメ

＝三重県紀宝町 全国に先駆けて保護条例を制定。祭りのみこしはウミガメ。



なまず

の里＝青森県福地村 村にすむなまず養殖に取り組む。なまず勝ち抜き競泳会の様子。



ホタル

日本一＝滋賀県山東町 ホタルでは唯一国の特別天然記念物に指定された。サミットやシェンバ会議も開催。



メダカ

の学校＝神奈川県小田原市 童謡「めだかの学校」の発祥地で、全国で初めて条例に基づき市の魚に指定。



昆虫

ドーム＝山口県むつみ村 クヌギ林のドームでは、カブト虫に触れ合うことができ、子供たちには人気の施設。



トキ

のやまさと＝新潟県新穂村 1羽と絶滅の危機にあったが、中国から贈られたつがいがい卵を産み、今や18羽が生育。





伊藤 一長

長崎市長

オンリーワンのまちづくり

長崎のまちが変わってきた、とよく言われる。ここ数年のさまざまな動きが重なり合って、その印象を強めているのであろう。

この変化の要因の一つに、まちの記憶を丹念に掘り起こし、それを目に見える形でよみがえらせてきたことがある。

昨年、ウォーターフロントに新しい商業施設が建ち、港の周りに人が集まるようになった。ほんの数年前までは、市民は港を自分たちのものと感じていなかったが、道路を整備し、商業施設が建つことで、港町としての記憶が一気によみがえったのである。

昨年の日蘭交流四百周年に合わせた出島の一部復元も、その一つである。いつ実現するかもしれないなかった市民の長年の夢は、行政が夢の日付を書き込んだことで、官民一体の力を結集することとなった。こうして、本物の場所の本物の出島が、一部ではあるが完成した。

出島はわが国の歴史に大きな影響を与えた存在であるとともに、長崎のまちにとっては原点でもある。まちにとって、最も鮮烈な記憶の一つが形になったことの意義は、長崎の歴史にとって大変大きい。

同じ意義をもった事業として、現在、シーボルトがわが国の俊英たちに蘭学を教えた「鳴滝塾」や、出島和蘭屋敷の中国人版ともいえる「唐人屋敷」、坂本龍馬が活躍した「亀山社中」などの顕在化にも取り組んでいるところである。

昨年、なかにし礼さんの小説「長崎ぶらぶら節」が直木賞を受賞し、吉永小百合さん主演で映画化された。その舞台となったのは花街の名残が漂う丸山界隈である。小説や映画のおかげで、この辺りを訪ねて来る観光客や市民が増えており、市では散策道路を整備することにした。

もともと「ぶらぶら節」自体は、長崎くんちの奉納踊りの曲の一つとして市民に親しみのあるものであったが、それ以上のものではなかった。なかにしさんが、この民謡の裏に潜む長崎情緒の記憶を物語として呼び覚ましてくれたのである。

それに呼応して、市民グループが長崎の民謡「ぶらぶら節」に現代風な振り付けをして「長崎ぶらぶら踊り」を考案した。現在、この踊りが市民の間で少しずつ広がりは始めている。市も踊りを発表するイベントや、踊りを教える出前講座を開設するなど、積極的に支援しているところである。

記憶を掘り起こして形にする仕事は、自分のまちという足元を確かめる作業でもある。その意味で、この作業は、文化面だけに限ったことではない。

平和事業、介護保険、環境政策、道路整備……すべての仕事において現場をきちんと見つめ、全国画一でない、長崎市民のための「長崎方式」を見つけていきたい。それが地方分権時代にふさわしい「オンリーワンのまちづくり」になると、私は考えている。

動物・生き物
による
まちづくり



生源寺真一
東京大学大学院教授

生き物によるまちづくりは個性的に

地域の物語を

発掘し、語り継ごう

昆虫少年

今、朝の五時半を少し回ったところだ。普段の私は四時半から六時の間に目を覚ます。

前の晩の行動によって、多少の違いがでるのは仕方がない。季節にもよる。夏は早い。だから、今朝も五時過ぎにはワープロに向かっているという次第である。その代わりにと言ってはなんだが、夜は一切仕事をしない。アルコールを楽しむ時間だと固く決意している、とでもしておこう。締め切りやらないやらで無理をしなければならぬ場合にも、起床時間を繰り上げる。これはほとんど苦にならない。おかげさまで、寝起きもすこぶるよいのである。

体質であり、習慣である。まずは両親に感謝しなければならぬが、子供のころ、とく

に小学校時代の生活パターンがいまだにからだの中に生きている。これも間違いない。自分の身体の内部には、あのころの朝の実感が確かにある。

五時前には目を覚ます。十分後には虫がご手をにうちから飛び出す。毎日ほとんど同じコースを足早に回る。お目当はクワガタだ。要所要所をチェックし終わるのに、小一時間はかかる。樹液の染みだした木々にへばりつき、目を皿のようにして探す。樹皮の間からクワガタが角をのぞかせている。そのあたり的小枝でもって、木の外側にかい出す。コツがいる。しくじると、奥に引っ込まれてしまう。そうなると、別のポイントをたずねるなりして、少し時間をおかなければならない。私の住んでいたのは名古屋市のはずれである。だからであろう、クワガタと言えば、コ

クワガタやスジクワガタ、大きいものでノコギリクワガタ、そ

れも多くは小ぶりの亜種で、あまり派手な種類はいなかった。六年ほど札幌に勤務して、ミヤマクワガタが簡単に捕まえられるのには感激した。ただし実際に捕まえたのは、友達と走り回っていた小学生の息子である。もっとも、今になってみると、子供のころは見向きもしなかったヨツボシケシキスイなどといった小さな甲虫が懐かしいという感じもある。おかしなものである。

開発と自然環境

幸運だったと思う。夏休みに入ると、朝の巡回に加えて、目が高くなると、ザリガニやドンコと呼んでいた小さな魚をとるため、隣の学区の池を目指して遠征した。ふたつ池という名のため池だった。高学年のリーダー格を中心に、だいたい四、五人のグループだったと記憶している。昼間は昼間で、セミだ、ザリガニだ、という毎日なのである。幸運だったというのは、あと十年遅くあの土地で子供時代を過ごしたとすれば、セミはともかくとして、クワガタやザリガニと戯れる体験は不可能だったと思うからである。

それこそあつというまに宅地開発が進んだ。雑木林は整地され、ため池も埋め立てられた。四十年近くたった今では、住宅地とい

うよりも、しゃれた商業地といったたずま
いとなった。あまりの変わりようであるから、
早朝のあのルートをいま案内できる自信はな
い。雑木林の樹液の臭いや腐食土の感触、た
め池の水温や藻の淡い色合いを、五感を通じ
て体に刷り込むことはもうできない。

ある世代までの日本人の多くが、似たよう
な経験と感慨をお持ちではなからうか。タイ
ムラグはある。名古屋のはずれなどは、さし
ずめ開発一番乗りというところか。開発の大
波はまずは都市の周辺部を洗い尽くし、しば
らくすると、少なからぬ近郊農村をのみ込ん
でいった。今やかろうじて残された農村は、
子供も大人も五感でもって自然に接すること
のできる特権的な場所になり変わろうとして
いる。ただし、意識的な保全措置がないまま
に放置されるならば、特権はそう遠くない日
に剥奪されてしまうかもしれない。気が付い
てからでは、もう遅い。

農村と動物

農村も変わった。人と家畜が触れ合う機会
が少なくなった。北海道の酪農地帯や阿蘇の

自然との触れ合いの場としてオオムラサキの森と蝶の里公園を整備。
自然観察会も開催される。●埼玉県嵐山町



放牧地など、一部の地域を除けば、都会から
訪れる人びとが目にするのできる家畜の
数は減少した。農村に住む人びとにとっても、
家畜に出会うチャンスは少なくなっている。
もともと、家畜そのものが減ったわけではな
い。数だけをとれば、むしろ増えている。た
とえば現在の牛の数は、四十年前に比べて五
割増である。豚は五倍、ニワトリも三倍半に
増加した。

家畜との触れ合いが減った理由は二つあ
る。一つは農耕用の家畜の消滅である。一九
六〇年ごろに登場した小型の耕耘機が、また
たくまに牛と馬にとって代わった。その耕耘
機も今では大型トラクターに席を譲ってい
る。かつては、東日本であれば馬、西日本で
あれば牛が、どの農家にも必ず一頭は飼われ
ていた。こうした牛馬が田や畑から、そして
農家の庭先から姿を消して久しい。

もう一つの理由は、増加した家畜のほとん
どが畜舎の中で飼われていることである。舎
飼という。えさも畜舎の中で食べる。だか
ら外部の人の目に触れることもない。そのえ
さであるが、大半は外国から輸入された穀物

コマダフチョウ



アカタテハ



ルリタテハ



キアゲハ



オオムラサキ



ウスバシロチョウ



オナガアゲハ



ホンバセセリ



イチモンジセセリ



「生活と自然を大切にするムツゴロウ王国」を
キャッチフレーズにまちづくりⅡ佐賀県芦刈町



や乾草である。日本の飼料の自給率は二五％にまで低下した。

子供がニワトリのようなありふれた動物の絵をちゃんと描けない。ときどき話題になることがある。けれども、描けないのは子供だけではない。こんなことがあった。もう十年以上も前になるが、研究室の教授が日本の畜産に関する一般向けの解説書を執筆された

（佐開津典生著『日本人と牛肉』岩波書店）。

私にその校正の仕事が回ってきた。たまたまそのとき、教授本人が長期にわたって海外出張中だったからである。別段、難しい仕事で

はない。順調に作業は進んだ。ところが、書肆に校了引き渡しとなる直前に、おかしいことに気が付いた。イラストがどこか変なのである。

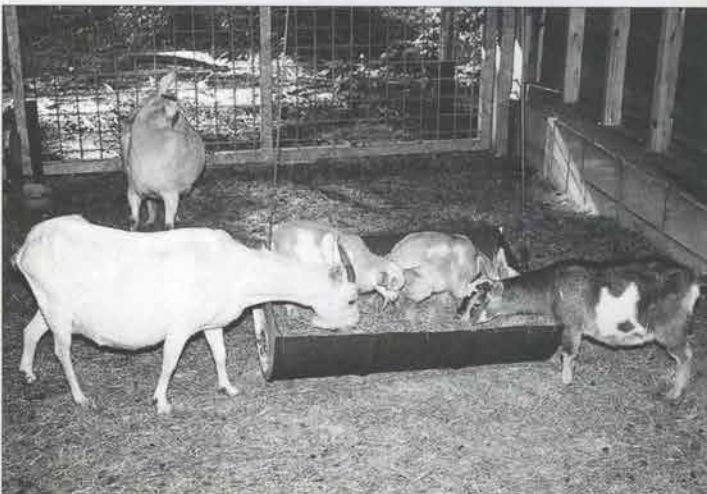
乳牛を真横から描いた挿し絵である。乳房からりっぱな乳頭が三つ出ている牛が描かれている。ということは、三つに掛けることの二列だから、全部で六つあるという理屈である。ここが変なのだ。ちゃんと二つ並んでいるイラストに修正をお願いして、ことなきを得たという次第。あとから考えると、冷や汗ものである。農業経済学の教授が、乳牛のまさに肝心かなめの部位に無知である。こんな誤報を、天下に触れ回ることになるところであった。

プロのイラストレーターにして、こうなのである。近ごろの子供はうんぬんなどと威張ることはできないではないか。かくいう私自身も、えらそうに人のことを言えたものではない。たまたま仕事の仕事なので、家畜を間近に見る機会がほかの人よりも多い。ただ、それだけのことである。そうでなければ、六つの乳頭に対してなんの違和感も覚えなかったに違いない。

個性的なまちづくり

生き物を求心力とするまちづくりの取り組みが始まっている。愉快ではないか。ひと口に生き物と言っても、大小種類はさまざま

ペットとして、食用肉としての販売を目指し、平成九年から進められているトカラヤギの飼育Ⅱ鹿児島県十島村



ある。闘牛の牛を前面に押し立てているまちがあるかと思えば、丹頂鶴の優雅な姿との触れ合いをトレッドマークにしているまちもある。ムツゴロウやウミガメといった人気者にひとほだ脱いでもらっているまちがあり、昆虫の力を借りているまちだって、もちろんある。そんなに数は多くないけれども、私自身が足を運んだケースもいくつかある。ともあれ、まことに個性的なのである。そもそも、生き物の力を拝借したまちづくりという発想自体が、ユニークと言えはユニークである。

高度経済成長の二十年の間で癖がついてし

まったのだが、つい最近に至るまで、全国のまちなみもステレオタイプの開発路線を競い続けてきたと言つてよい。その結果出来上がったのは、しばしば個性に乏しく、都会と農村を足して二で割つたような風貌の、ごくありふれた雑居空間であつた。こうした定型的な開発路線に対するアンチテーゼの一つが、生き物の力を借りたまちづくりである。アンチテーゼといつても、肩ひじを張つて力み込んだ姿勢はない。ジョークの香辛料のきいた取り組みもある。仕掛け人や担ぎ手の皆さんが、自分自身で楽しんでいる。だから、見ているこちらにも愉快になるのである。

スポットライトを浴びることになった生き物は、まちによつてさまざまである。当然である。まちが百あれば、自然条件もまた百ある。一見似ているようであっても、同じ条件は二つとない。こうした条件の違いをシンボリックに表しているのが、まちの自慢の生き物なのである。自然環境と人との交流関係を象徴する存在、これが自慢の生き物にほかならない。ここには歴史がある。生き物への着眼を通じて、まちの歴史の大切な一面にあらためて光が当てられるというわけである。

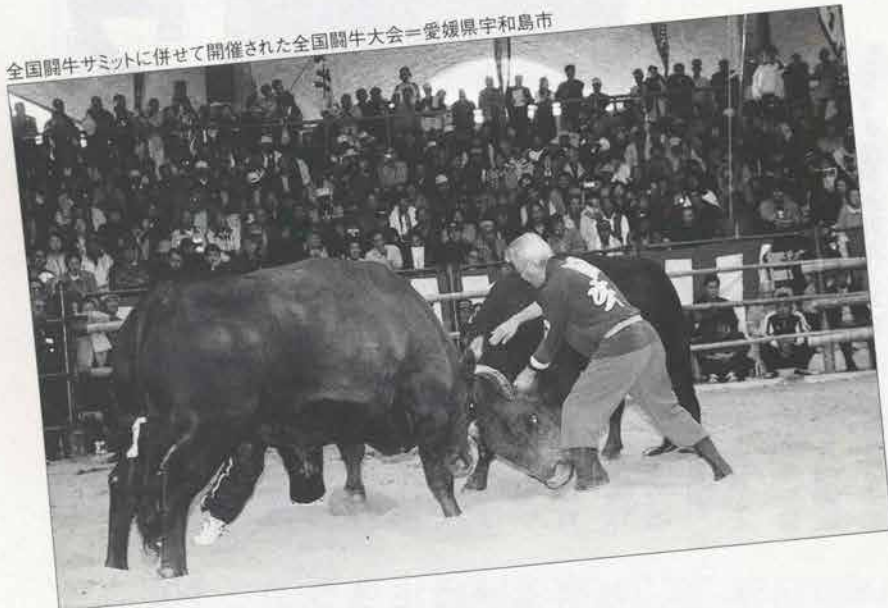
生き物と人間の交流の歴史は、そのまちなみにはない固有の物語である。生き物の力を生かしたまちづくりは、そのまちなみにはない

語を掘り起こす試みである。個性的なまちづくりとは、なにも無理に奇をてらうことではない。埋もれていた地域固有の物語を発掘し、これを語り継ぐことなのである。

人間のなかにある自然

生き物の力を借りたまちづくりは、自然環境を保全する意識的な取り組みである。自然

全国闘牛サミットに併せて開催された全国闘牛大会―愛媛県宇和島市



と人間の交流のあり方について、あらためて考え直す取り組みでもある。この点でも、都市化の達成度を唯一の尺度としてきた戦後の開発の流れとは、一線を画したチャレンジであると言つてよい。ごく短時間であつてもよい。生き物と向き合い、ふれあうことによつて、私たちは長らく忘れていた自然の感触を手にすることができる。そこには、記憶を呼び覚ます糸口がある。

多くの子供たちにとっては、これが思い出をつくるきっかけとなるであろう。ただし、この場合の思い出とは頭に詰め込む知識としての思い出ではない。五感を通じてからだに記憶するタイプの思い出なのである。いわば、人間自身の内部にある自然に刻み込まれる、そんな記憶である。なかには、自分の思うようにならない生き物という存在に、初めて出会った子供だっているかもしれない。思いどおりにならない存在、それがからだの外にある自然であり、その自然の本質を感じとるのが、内なる自然なのである。子供たちが生き物と触れ合う機会を意識的につくり出すこと、これは、自然の破壊にまい進してきた大人の社会に課せられた重い責務である。生き物の力を借りたまちづくりの試みには、案外深い意味がある。

タンチョウ

動物・生き物
による
まちづくり①
北海道鶴居村



平成の時代に入り、全国コンテストで「乳質日本一」になること五回。日本で一番おいしい牛乳は鶴居でとれると自負する。

村では近年、恵まれた自然環境を生かし、釧路湿原が周辺に望める岬までドサンコを使ったトレッキング「ドサンコ釧路湿原自然探勝会」を企画した。これが人気を呼び、これまでにまして日本各地から観光客が数多く訪れるようになった。

観光産業の支え

「鶴が居るから鶴居村」。単純明快、その名のとおり日本で一番タンチョウが飛来する鶴居村は、北海道の東部に位置する。村の南東には釧路湿原国立公園が、北は阿寒国立公園に接している、人口約二千六百人の自然豊かな小さな村である。

基幹産業は酪農で、村で生産される牛乳は、

一方、鶴居村の観光産業を長年にわたり支えてきたものにタンチョウは欠かせない。鶴居村のタンチョウは千円札の裏に描かれていることでも有名だ。タンチョウが最も多く飛来してくる冬に、その優雅な姿を撮影しに来るカメラマン、タンチョウをひと目見ようという観光客や温泉・レジャー施設利用者も増えている。

さて、このタンチョウだが、渡り鳥だと思っておられる方が意外と多いが実は「留鳥」だ。古くから北海道各地に生息・繁殖してい

たことは、サルンカムイ（湿地の神）として、アイヌの伝説に取り上げられている。

保護の動き

タンチョウは一年中、北海道の東部一円をねぐらとし、子孫を育て、えさが豊富に獲れる春から秋はその姿を人の目から隠し、えさが獲れなくなる冬になると、えさを求め人里に現れ、その優雅な姿は人びとを魅了する。

今では約八百羽の生息が確認されるまでになったタンチョウだが、大正の中ごろには絶滅したものと思われていた。開拓民の入植開発による生息範囲の減少、乱獲などがその原因だと思われる。

しかし、十三年、偶然にも道庁職員によって釧路湿原に十数羽のタンチョウが確認されると、昭和十年には、国の天然記念物に、またその繁殖地（釧路湿原）約二千七百五十ヘクタールは保護区にそれぞれ指定された。その後、国の天然記念物保存法は文化財保護法に変わり、二十七年、国の特別天然記念物に指定されると、タンチョウに対する保護対策が数多くとられるようになった。

様々なイベントでタンチョウ売り込む 地元民の給餌活動で800羽が生育



鶴居村振興課主事
佐藤大輔

また、地域でもこれに追随し、学童や住民による冬期間の地道な給餌活動、タンチョウ保護団体の啓発活動も始まった。これらが功を奏し、タンチョウも急速に人間に近づくようになり、冬場の給餌活動によるえさ不足の解消もあいまって、現在の生息数の増加につながった。

先人たちのこうした努力による保護活動は、タンチョウを絶滅の危機から救った。

給餌場とフェスティバル

村には給餌場が数多くあるが、その中でも「鶴見台」と「鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ」に最も多くタンチョウが飛来する。二月の半ばごろから「鶴の舞い」と呼ばれる求愛ダンスも見られる。ここを訪れる観光客は年間約四万人にも達する。

また、毎年、生息数を当てる「タンチョウクイズ」を村の観光協会が実施し、正解者には豪華賞品が当たるとあってか、はがきや電話・ファクスそしてインターネットでの応募が昨年度では約二万三千件にも上った。

毎年一月には、「タンチョウフェスティバル」が開催される。近年まで「鶴見台」付近の牧草地で行われ、本物のタンチョウを間近に、村民をはじめ近隣の釧路市などから多くの参加者が集まり楽しまれてきたが、今では場所を市街地付近に移して行っている。

このイベントでは、タンチョウにまつわる数多くの催しが行われる。その中の一つに「タンチョウ耐寒競争」というものがある。これは、参加者がそれぞれタンチョウに似せた衣装をまとい、素足になって川に入る。そして、片足を上げてバランスをとり、だれが一番長く立っていられるかを競う。

この時期の気温は、昼間でもマイナス十度以下。水温も零度近くになるが、競技に参加する人の中には、そのような状態で十五分以上も耐え続け、主催者側がストップをかけたケースもある。この人いわく「タンチョウになりきった」と感慨深げだが、見ているほうがいたたまれなくなる。また、馬の代わりに人間が重さ約四百kgの馬ソリを引く「人間ばんば競争」も呼び物の一つとなっている。

凧あげ隊

タンチョウに関連したイベントをもう一つ。秋の収穫祭の前日、村の若者が重さ約八百kgの牧草ロールをみこしにして市街地を練り歩く「丹頂総乱祭り」は、地域の人びとが手づくりで運営する数少ない行事だ。初めは村の青年組織が地域の若者に呼びかけて行っていたが、今では北海道各地から担ぎ手が集まるほどの大きなイベントになった。

村には、タンチョウの立体凧を全国各地で掲げて村をPRしようと頑張っているグループ

「鶴居村たんちよう凧あげ隊」がある。商工会青年部や婦人部、青年団体・農業青年団体などの有志が集まり、「鶴居村をもっと全国にPRするため」と、以前から村のイベントなどで掲げていたタンチョウの立体凧を、他町のイベントで掲げたところ、大きな反響を呼んだ。これを契機に「鶴居村たんちよう凧あげ隊」を発足、全国各地のイベントに出



タンチョウ耐寒競争

タンチョウ立体凧



向き、本物と見間違えるほど精巧にできた立体凧を揚げ、全国に鶴居村をPRしている。

今日では全世界から注目されるようになったタンチョウ。鶴居村はそのタンチョウから多くの恩恵を受けてきた。タンチョウを再び絶滅の危機にさらさないよう、自然との共生を図ると同時に、新たな地域の発展を目指し、タンチョウと共に羽ばたいていきたい。

ナマズ

動物・生き物
による
まちづくり②
青森県福地村

福地村は、青森県の南東、三戸郡の東側に位置し、村の中央を馬淵川が流れる。川沿いに水田が広がり、丘陵地には、畑、果樹園、山林が続く自然豊かな村である。

ことの始まり

昭和六十三年、竹下内閣が「ふるさと創生一億円」を提唱したことから当時、村の第三次総合振興計画策定のため、村民からの公募や各種団体からの推薦などで発足していた「村づくり委員会」で「一億円」の使いみちを検討することになった。

その結果、各部会から①温泉開発②ナマズの里づくり③ニンニク球の製造・販売④イメーシングの制作の四つの案が提案された。この中でもとくに異色だったのが、「ナマズの里づくり」。昔から、馬淵川に生息しているナマズをシンボルマークとして利用し、イベントの開催やナマズ公園の整備、ナマズの養

殖などさまざまなことを行おうというもの。

研究会の設置

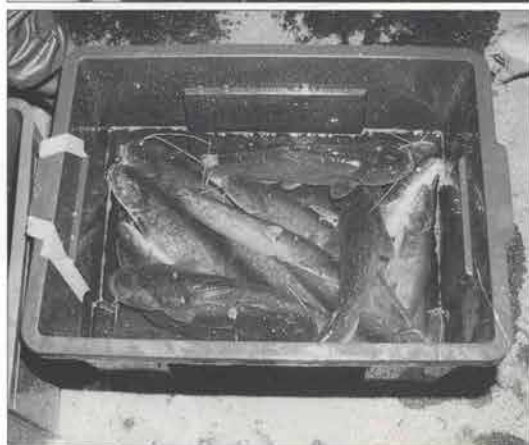
村はナマズに取り組むことを決めたが、まず「だれが事業を行うのか」「どのような方法で事業を進めるのか」を協議した。

そこで出てきたのが研究会の設置。村民からの公募と「村づくり委員会」の生活環境部会（ナマズを提案した部会）の代表とで構成する「日本なまずの里づくり研究会」が平成元年七月につ

くられた。川で捕獲する天然のナマズだけでは、料理のメニューを開発したり、ほかの料理店に販売するだけの絶対量が不足することから養殖の研究に乗り出した。研究といっても、ナマ

ズはもとより魚に関しては全くの素人の集まり。まずは先進地に学ぼうと、養殖に成功している埼玉県熊谷市、ナマズの料理店がある福島県塩川町を視察した。

しかし、埼玉県の養殖場は、アメリカカナマ



ナマズ捕獲作業

ズを養殖していて、福地村が目指す日本ナマズとは異なっていた。そこで日本ナマズの養殖に成功した栃木県立馬頭高校に出掛け人工的にナマズの産卵と放精を促し、自然に受精させてふ化させるという方法を発見した岡英

ふるさと創生資金でなまずの里づくり 失敗繰り返したふ化



福地村企画振興課主任主査
坂本康浩

一先生から指導を受けた。

村に帰ってさっそく、岡先生に教えてもらった方法を実行してみた。しかし何日も産卵せず失敗した。その原因が分からず岡先生に連絡したところ、わざわざ栃木県から来て研究会を指導してくれた。このかいあって卵が産みつけられ、二年七月二十九日の朝には初めてふ化が成功し、かわいい子ナマズが元気に泳ぎ回る姿を観察することができた。研究会のメンバーは肩を抱き合って喜んだ。

せんべい汁と天ぷら

ナマズの人工ふ化も二回に一回は成功するようになり、ふ化した稚魚を放流できるようにもなった。研究会は、五年に「なまず養殖出荷組合」を設立した。

村最大のイベント「ジャックドまつり」などでナマズ料理の試食会を開催するなどPR活動も展開した。とくにナマズの身を煮て作る「なまずせんべい汁」。これはだし汁もナマズのアラからとる。ナマズの天ぷらをのせた「なまず天ぷらそば」は、販売開始と同時に長蛇の列ができるほど好評だ。しかし、最近になってナマズの稚魚がふ化後七日程度で全滅するようになった。水質の問題か、水温の関係なのか、原因が分からない。井戸水を使ったり、水道水を使ったりしてみても、成功したり失敗したりの繰り返しだった。

10年の努力が一瞬のうちに

十一年十月二十七日、低気圧が太平洋沖を北上した影響で、青森県南地方が暴風雨に見舞われた。

「ナマズの池が決壊しそう」と雨が二層激しくなった翌二十八日朝、青森市に出張していたなまず養殖出荷組合の高橋隆博組合長は、奥さんからの電話で村にとんぼ返り。

そのとき、道路からは雨水がナマズ養殖池に流れ込み、水が溢れかけた。地元消防団が土のうを積んだそばから水がどんどん入り、取水口近くの堤が崩れた。水が勢いよく流れていった。

池には、それまで捕獲したナマズやふ化させたナマズがいっぱい入っていたが、あっけなく崩れ全部流されてしまった。高橋組合長が駆け付けたときには、ナマズは一匹も残っていないかった。

大災害のつめ跡、心の傷がまだいえないまま、ナマズの産卵期がやってきた。一応、池は復旧した。繁殖に使うナマズは捕獲のため、苦米地川を夏前に清掃、準備万端で産卵のため遡上するナマズを待った。しかし、何日も待っても影も形も確認できなかったが、ようやく馬淵川で二百匹ほど捕まえ、オス・メスを分けて池に放し、繁殖作業に取りかかった。

公園、レストハウス建設へ

ナマズは一匹のメス親から約一万个の卵が産まれるが、ふ化後一年ぐらいいまで共食いする。研究会でのデータだと歩留まりは二％程度にすぎない。ちなみに馬頭高校では、二〇％。

ふ化が成功しても、成魚に育てるのは難しく、組合が何度もぶつかってきた大きな壁だ。これを打破するため、今年二月に埼玉県加須市にある県農林総合研究センター水産支所（なまずの養殖に関しては国内で有数の研究所）に出掛け「えさのミジンコが繁殖する際、池の水の酸素量が減って稚魚が酸欠状態になる」「水流が少なかったり、障害物が多いと稚魚が密集状態になり共食いする」といったことが分かった。今年は、丸い大型の水槽を購入した。その結果、ふ化は上々のできで歩留まりは来春確認しないと判断できないが、現在のところは良いようだ。

一見、生命力に溢れ強そうなナマズだが、実際は、すごく繊細で、光や振動に敏感だ。ナマズを村のイメージアップの核とできるよう、今後も研究を続け、「ナマズ公園の整備」「ナマズ料理が食べられるレストハウスの建設」など、組合員が当初描いた夢の実現に向け、また、村づくりの成功例となるよう組合員とともに頑張っていきたい。

メダカ

動物・生き物
による
まちづくり
神奈川県小田原市

小田原市は、神奈川県西部に位置し、富士箱根伊豆国立公園を望む人口約二十万人の地方都市である。東京からは約八十キロの位置にあり、相模湾に面し、沖を流れる黒潮の影響を受けて温暖な気候条件を有している。

市では、豊かな自然と歴史的文化遺産などの環境を守り大きく育てていくため、平成七年を環境元年として、環境保全に関する七本の条例を整え、十年には「環境基本計画」を制定した。十二年十一月には、特例市へ移行し、水質汚濁防止法の委譲を受け、着実に環境政策の充実に努めている。

童謡「めだかの学校」発祥の地

市内中央を流れる酒匂川流域には、水田地帯が広がり、その用水路に神奈川県内で唯一、二十年来変わらぬ遺伝子を持つ固有のメダカが野生の状態で生息している。メダカは、小田原が童謡「めだかの学校」の発祥の地である。

ることも市民になじみが深く、この貴重な小田原のメダカとその生息地の保全に向けた市民と行政の活動が積極的、継続的に行われている。

日本全国で歌い親しまれている童謡「めだかの学校」は、童謡作家の茶木滋さんが、終戦当時、市内西部の丘陵地を流れる荻窪用水の周辺で、息子の義夫さんと買い出しの途中で交わした会話をもとにしてこの詞をつくられたそうである。

これにちなんで、市では、平成八年五月に、舞台となった荻窪用水に「めだかの学校」を開校し、メダカが生息できるような環境づくりの先駆けとなった。その後、市民の活動により、市内の小学校や排水路において同様の試みが行われ、「メダカの分校」も開校されるなど、市民レベルでの保護活動が熱心に行われている。

市民の手で保全

「小田原市環境基本計画」の策定にあたり、八年に実施した市民参加による「身近な生き物調査」で、メダカを指標の一つとしたこと



めだかの学校を開校

が契機となり、翌年には、市民と行政からなる「市民メダカ調査団」を結成した。市内の現況調査を行い、メダカが野生の状態で生息しているのを確認した。またそのころ、メダカの希少性がマスコミに取り上げられ始め、「メダカを守って欲しい」との市民からの声が上がっていった。

こうした中、九年八月には、自治会、学校、各種団体などで構成される「市民メダカ会議」が組織され、「市民の手によるメダカ保護」

メダカを保全し、豊かな自然環境を
そつとのぞいてみてぶくらん



小田原市長
小澤良明



メダカのお父さんお母さんへのメダカの配布

を中心とした保全方策の研究、検討が定期的に行われている。具体的には、メダカとその生息地を保護するための立て看板の設置や、メダカの飼育制度（メダカのお父さんお母さん制度）の立ち上げなど、系統を維持するための保護活動に取り組んでいる。

お父さんお母さん制度

メダカのお父さんお母さんになってメダカを増やしてくれる市民や小中学校などにメダカを配布し、飼育を通して、種の保存を図りながら自然保護意識の高揚を図っている。市で毎年公募し、現在二百八十五人のお父さんお母さんにより、小田原メダカの飼育が行われている。

この制度は、十一年度にスタートして以来、大好評で、毎年定数を上回る応募がある。そのため、配布するメダカの準備にはひと苦労で、市が繁殖して毎年増やしている子メダカ約五百匹のほか、すでに登録いただいているお父さんお母さんが増やした子メダカも合わせて、新しいお父さんお母さんに配布している。制度の運営には、神奈川県水産総合研究所内水面試験場の協力もいただき、小田原メダカの希少性や、固有種の系統維持、メダカの保護活動、メダカの飼育方法などについてミニセミナーも開催している。また、メダカの飼育に関して学識を有する方などを飼育指導員に委嘱し、お父さんお母さんからの飼育に関する相談や質問に対するアドバイス役をお願いしている。

全国で初、条例で「市の魚」に

本市では、特例市への移行に伴い、水質汚濁防止法の委譲を受けたことから、水環境保全意識のさらなる高揚を図るため、十三年三月に「淡水魚メダカ」と「海水魚アジ」を市の魚に指定した。これは、小田原市美しく住み良い環境づくり条例に基づき「市の木」クロマツ、「市の花」ウメ、「市の鳥」コアジサシに続いて指定したものである。

二つの魚を指定した理由は、母なる川・酒匂川などが市域を縦横に流れ、豊饒の海・相

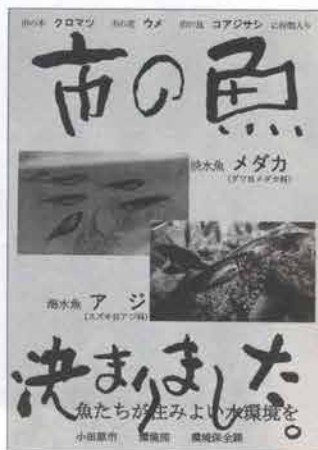
模湾に面した本市において、淡水魚と海水魚の二種類の魚を指定することがふさわしかったこと、また、市民公募で応募数が多かったことなどである。地方自治体が条例に基づいて「市の魚」を指定するのは、全国初である。

市役所二階の市民ロビー内には、「市の魚」展示コーナーとして、メダカ的大型水槽（約三層）とアジの写真パネルを設置し、来庁された市民の皆さんに親しんでいただいている。

メダカに象徴される貴重な野生動植物の生息を可能とするような小田原の自然環境は、私たち市民の貴重な財産であり、こうした環境を次世代の子供たちに引き継いでいくことは大変重要である。

現在、小田原のメダカの系統維持および種の保存を担保する方策を提示するとともに、メダカの生息地区にかかわる行政各所管の開発や改修計画を整理することを目的に「メダカの保全に係る基本方針」を策定中であり、本年度中には公表する予定である。

こうした取り組みにより、メダカと共生できるような環境のまちづくりをさらに進め、本市の豊かな自然環境を次世代の子供たちへ伝えていきたい。



「市の魚」ポスター

トキ

動物・生き物
による
まじつきり④
新潟県新穂村

「トキ」が生息する新穂村は、佐渡ヶ島の中
央部、国仲平野穀倉地帯に位置し、東西十二
キロ、南北八キロ、総面積六三・三一平方キロで、
日本一おいしい「コシヒカリ」の産地である。
また、丘陵地域は商品名として知られてい
る「おけさ柿」の産地でもあり、北海道をは
じめ首都圏に出荷されている。一方、山林で
は良品質の佐渡「シイタケ」が生産され、い
ずれも消費者から好評を得ている。

日本最後の「キン」

村の人口は約四千七百人と小さな村だが、
豊かな自然環境の中で国際保護鳥「ニッポニ
ア ニッポン」の学名で知られているトキが、
生息地として選んだ地が新穂村である。

現在日本で生まれた最後のトキ「キン」
(推定三十四歳、人間年齢百歳以上)が元氣
に飼育されている。そのキンが元氣なうちに
中国から借り入れたいという村民の願いでト

キがすむ中国陝西省洋県と十数年来の交流を
続け、昨年は同県から八人の小中学生を含む
十八人が来村した。

小中学生はホームステイ、芸能披露をはじめ
村の小中学生と学校給食を取りながら交流
し、姉妹校締結をした。一昨年夏には当村か
ら小中学生を含

む三十四人が教
育交流をさらに
深めるため洋県
を訪問。子供た
ちの交流は、国
際的な広い視野
を身につけ、将
来活躍してくれ
るものと期待し
ている。この間、
村は県、旧環境庁および中国政府にトキの借
用を数回にわたって要望した。



トキセンターの飼育ケージ



中国陝西省洋県との友好交流
(上)交流会でのアトラクション(下)小学校の姉妹校締結

席から、わが国に友友(雄)、洋洋(雌)の
つがいが増呈されたが、これは深い友好のた
まものである。

十一年四月、友友と洋洋から優優(雄)が
生まれた。わが国では人工による初めてのト
キの誕生だ。昨年は二羽新新・愛愛が生まれ

友友と洋洋

友友と洋洋

村同士の友好交流協議書締結などの熱意が
通じ、平成十一年一月には江沢民中国国家主

人工繁殖も順調なスタートを切った。

今年に入り友友・洋洋から六羽、優優・
美美のつがいから五羽合計十一羽の雛がすく
すくと育ち飛び回っている。十一年の初めに
は「キン」一羽だけだったトキセンターも二
年半で十八羽が飼育されるまでになった。

絶滅危機のトキ、中国の協力で18羽に 日本の空に舞う日を期待



新穂村長
本間権市

このように順調に繁殖が進むと、十八年には百羽に達するのでは、と期待している。五年後には野生復帰に向けた自然馴化、飼育ケージの増設も必要になってくる。

また、近親交配を避けるために、中国の協力を得なければならない。

環境づくり

トキを野に放す場合、農業とトキの共生をどう進めていくかが大きな課題の一つである。このため今年から村では、自然耕（無農薬、減化学肥料）を取り入れ挑戦を試みている。

トンボやドジョウ、タニシなどの水生小動物がすみつく田畑での米づくりである。当然のことながら、収量減や、病害虫による米の品質低下が心配される。このため東京の消費者団体に理解してもらいながら、オーナー制度を取り入れ、消費者の支援を得て進めていきたいと考え、七月に東京・新宿の安田生命ホールでトキ支援のシンポジウムを開催した。会場には百五十人余が参加、トキを野に放すための自然農法にかかわるコスト負担なら喜んで協力するとの温かい言葉が寄せられた。具体的にはオーナー制度を活用し、生産者と消費者が一体となつてトキを野に放せる環境づくりをしようというものである。

今までは多少健康や環境面で問題があつても効率的経営を目指し、生産を増やして所得

増を指導してきたが、その点では全く逆で、コストが高くついても健康や環境に負担のかからない農業振興を目指さなければならぬ。二十世紀は豊かな生活を手にした反面、地球を傷つけ、その生態系をも壊し多くの自然を失った。そして何よりも大事なことは自然を大切にすること、感謝する心も失いかけてるのである。

ドジョウの養殖

トキのえさは、ドジョウ、タニシその他小さな水生動物であり、村としてもドジョウの養殖を始めた。昔は養殖農家もいたが今は全くおらず、手探り状態で進めている。約五十町の山田で十一年から取り組み、トキのえさが不足するときはトキセンターへ提供している。

何しろ百羽のトキに一羽当たり百⁴⁰のドジョウを与えるとなると一日十⁴⁰、年間約四⁴⁰が必要となる。野生復帰時のえさ場づくりのため棚田を復元し、養殖技術の修得に努力している。

中国より贈呈されて以来、年間三十万人近い人びとが保護センターのあるトキの森公園を訪れ見学している。以前は入園者数がわずかに二万五千人ほどであったものが今では十倍以上になっている。村ではトキを見て特産を買ってもらうよう第三セクターによる売店を開設した。村の特産品であるコシヒカリ、お

けさ柿、ネクターリン、イチゴ、サクランボ、アイスクリーム、雪割草などであり、村の活性化に役立っている。また、役場前には実物の一・四倍のトキのミニメントも造り、PRに努めている。

トキを絶滅に追い込んだのは人間であると思う。かつては全国にすんでいたが昭和初期



山田を利用したドジョウ養殖池。
トキのえさのドジョウの養殖技術の確立を目指す

には百羽前後に、戦後の混乱期後には十羽程度にまで激減、五十六年には全鳥捕獲に踏み切ったが残念なことに現在では日本のトキとしてはキン一羽だけ。今後は日中協力のもとに、再びトキを日本の空に舞わせようではありませんか。全国の皆さんによりしくご協力をお願いするところである。

ウミガメ

動物・生き物
による
まちづくり⑤
三重県紀宝町

量は約三千^リにも達するのである。

東京・霞が関の中央官公庁からみれば、本州では一番遠

今年は、例年になくアカウミガメの上陸であり、八月十日現在で、十一頭の上陸が確認された。全国のウミガメ上陸海岸地域に比べてみると、その数が少ないことは間違いない。しかし、本町にとっては数年ぶりの喜びである。というのも平成十二年度は三頭、十一年度は二頭、十年度は三頭、九年度にいたっては上陸が確認されず、という状況にあったからだ。

本州で一番遠い町

本町は、紀伊半島の最南端で、三重県と和歌山県の熊野川を隔てて県境に位置し、三重県の南玄関として発展している人口約八千人の米・温州みかんなどを主農産物とする農業を中心としたまちである。面積は七六・七八平方^キ、その約六〇％を山林が占めている。気候は年間平均約十七度と温暖で、降雪もほとんどなく、多雨地域に属するため年間降雨

い地域に属するといっても過言ではない。鉄道で時間をみるならば、東京から名古屋までが新幹線、名古屋から本町まで紀勢本線に乗り換え、通算約六時間の長い旅である。道路でいえば、東名・中央高速で名古屋に入り、名阪国道を走って高速伊勢自動車道の勢和多気インターであり、国道四二号をひたすら南に走るのである。飛行機では、和歌山県の白浜空港があるが本町から約二時間かかり便利さから鉄道、道路を利用しているのが現実である。

海岸パトロール

熊野灘に臨む七里御浜海岸約二十四^キのうち、本町には井田海岸約四^キがある。そんなわが町が、昭和六十三年三月に「ウミガメ保護条例」を全国の市町村に先駆けて制定したことで、一躍脚光を浴びるようになった。ウミガメが安心して産卵できるよう、上陸した

全国に先駆けウミガメ保護条例制定 自然環境変化への対応が課題

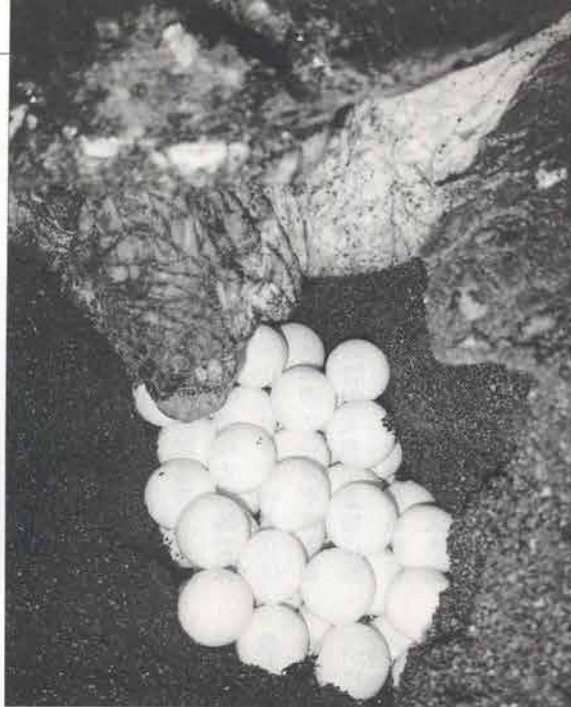


紀宝町企画調整課長
西村政美

地域住民と子供たちによるふ化した子ガメの放流会



ウミガメの捕獲、産卵された卵（一頭約百二十個）の採取を制限した「まちの法律」で、六人のウミガメ保護監視員を委嘱し、六月から七月にかけての二カ月間の産卵シーズン中、海岸パトロールを行っている。毎年、六月一日にウミガメ保護監視員、マスコミのテレビ・新聞の各社に情報発信の協力をいただく



ウミガメ公園

六十三年当時、ウミガメが産卵する井田海岸は、国道四二号から波打ちぎわまで、砂利浜が約百メートルあったが、現在は環境の変化で侵食され、ウミガメがなかなか産卵できる環境でなくなっていました。これは非常に残念なことだ。

ウミガメマイタウンとして条例とともに、ウミガメの保護を図るシンボルとしての大きな役割を果たしているのがウミガメ公園である。平成元年度に国のふるさとづくり特別対策事業の指定を受けて営林署の用地約四千四百平方メートルを取得、国道四二号沿いに公園の建設に着手し、五年三月に完成した。総事業費は用地費を含め約二億七千万円。

公園にはウミガメに関する展示資料館、町営のふ化場、ふ化した子ガメなどを飼育しているプール付の飼育棟を設置した。このうち資料館に

とともに、町職員が海岸の一斉清掃をし、パトロールを開始する。ウミガメ保護条例制定当初は、毎年三十頭前後のアカウミガメが上陸していたため、パトロールは、毎晩十二時ごろまで行っていたが、上陸頭数がなくなってきた現在では週末の土・日曜日だけ実施している。

また、国土交通省から道の駅の指定を受け、国道四二号を走る多くのドライバーに親しま

れ、観光客は、年間約十万人を数える。普通車二十五台、大型車二台収容のスペースの駐車場もある。施設の入館料は無料。国道四二号に、さんさんと輝くウミガメ公園は、観光客に安らぎを与え、気軽に利用していただいている。また、紀宝まつりでは、ウミガメみこしで町内をパレード、PRしている。

途絶えた観察会と勉強会

五年のウミガメ公園開園当時は、上陸してくるウミガメの観察会や地元の研究家を招いて勉強会を行ったり、ふ化した子ガメを地元の小学生の手によって海へ放流する会を実施していたが、現在では、それも環境の変化によるウミガメの上陸が減り少なくなりできなくなりました。

決して悲観的ではないが、環境の変化による現実、本町にとっても今後の課題として厳しく受け止めなければならぬ。

ウミガメに優しいまち、環境に優しいまちとして、さらに全国に情報発信できる新たな紀宝町を見ていただけるように頑張っていきたい。



ウミガメ公園内のアンテナショップ

ホタル

動物・生き物
による
まちづくり⑥
滋賀県山梨町

途絶えた蛍まつり

山梨町のホタル保護の歴史は古く、大正時代までさかのぼる。

現金収入のあまりなかった時代、ホタルは青年会の貴重な収入源であった。大切なホタルがよそ者に捕られて減少したことから見張り番をつけたのがホタル保護の始まりというから、当時は現在とはかなり違った目的で保護されていたようだ。

昭和二十七年に、「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」が国の特別天然記念物に指定され、地元区民によって町内を流れる天野川で「蛍まつり」が開催された。特別天然記念物に選ばれたホタルは山梨町だけである。しかし、三十四年の伊勢湾台風でホタルの巣が根こそぎ流されてしまったのと、生活雑排水や農業による河川の汚染で、ホタルの姿はほとんど見られなくなってしまう。と同時に

蛍まつりも開催できなくなってしまう。

その後「天野川源氏蛍を守る会」をはじめ、地元有志の懸命な増殖保護活動の努力によってホタルが少しずつ増えてきた。

四十七年には「山梨町蛍保護条例」を制定し、国の指定を受けている天野川のホタルの捕獲を禁止するなど、保護に取り組んできた。平成九年、町の総合計画を新しく策定し、まちの将来像を「水やさしく 光まうまち 美しい山梨―ひと まち くらし」とした。先人が残してくれた美しい農村環境を見直すとともに自然と共生して住民みんなが美しい文化を大切にしなが、新しいことにも挑戦し、住民と行政が協働でわが町をつくっていくというものである。

条例の全面改正

「山梨町蛍保護条例」もホタル保護からさらに良好な自然環境を保全し、健康で文化的な生活を確保することを目的として総合計画策定と同時に全面改正した。改正の主な内容は、
①保護の対象をホタルの成虫だけでなく幼虫、えさになるカワニナまで広げ捕獲を禁止

②保護区域を町内全域に拡大

③河川管理者の責務を明確にし、河川工事は自然にやさしい工法で行い、三面コンクリートの河川改修の禁止

④河川区域での草焼きや除草剤の散布、堤防の草刈りなどについても一定期間禁止―などである。

まちの主産業である農業も、環境に配慮している。病害虫の駆除は、ヘリコプターを使った航空防除で行ってきたが十年からは周囲に影響の少ない地上防除に切り替えた。農業従事者の高齢化ともあいまって十二年にはラジコ



わが町のホタルは日本一 官民あがって保護活動展開



山梨町産業振興課参事
中川澄子



地元小学生・幼稚園児によるホタルパレード

ンヘリを購入し、病害虫防除を行っている。
 こういった努力が実り、毎年六月の上旬と
 もなると町内全域の河川で自然のホタルが乱
 舞するようになった。一級河川の大きな川か
 ら農業用水の小さい小川にいたるまでホタル
 が飛び交うさまはそれは美しい。

手づくりのイベント

ホタルまつりが復活して今年で十八回目を
 迎えた。ホタル復活直後のまつりはイベント
 業者にステージショーをやってもらうなど行
 政が計画開催し、まつりに来る人たちも地元
 の人がほとんどであった。

平成八年のホタルまつりは、行政主体から
 町民と行政が協働でつくり上げる手づくりの
 イベントへ、まず実行委員の公募から始まっ
 た。実行委員は広報、催事の二部会に分かれ、
 企画から運営まですべて住民の手に委ねた。
 広報部員は、京都、大阪、名古屋まで申し

まきに出掛けた。宣伝も実行委員の勤務する
 会社の社内報に記事を提供するなど経費をか
 けず行った。

催事部はまつり会場の一室にホタルの光を
 学術的に説明する「科学館」のコーナーを設
 けたほか俳句会も開催した。また雨が降って
 も見られるようにホタルトンネルを設営した
 が、自然な姿で見てもらうのが一番とこれは
 一年だけの催しとなった。

回を重ねるごとに組織も充実し、今では総
 務、広報・案内、イベント、交通対策、ホタ
 ル館、ホタル研究部、事務局の七つの部会に
 分かれ、会場周辺を光で演出する手づくりの
 あんどんや、町内数カ所に設けられたホタル
 発生地を結ぶシャトルバスの運行など行政だ
 けではとてもできないまつりを繰り広げてい
 る。今年のホタルまつりには九日間の期間中
 に約五万五千人が集まるイベントにまで成長
 した。まつりを支える町民ボランティアは延
 べ二千人を数えた。何よりもうれしいことは、
 町の人たちのホタルへの関心が非常に高まっ
 たということである。ホタルが、そしてホタ
 ルの出る環境がわが町の宝物であるというこ
 とに気付く、この環境を守る大切さが認識さ
 れるきっかけになっている。

サミットとシエルパ会議

一方、ホタルについて全国的に取り組んで

いる組織に「ほたるサミット」と「ホタル祭
 りシエルパ会議」がある。前者は、ホタルで
 日本一のまちづくりをしようと集まった十三
 市町村のサミット会議である。今年は六月に
 山口県豊田町で開催された。毎年ホタルの季
 節に一堂に会し、情報交換を行うとともに環
 境を守る大切さと呼び掛けている。また、加
 盟市町村で災害応援協定を結び友好連携を深
 めている。

シエルパ会議はホタルまつりを実際に行っ
 ている自治体の担当者が実践に基づいた情報
 を交換するもので、結成三年目である。昨年
 は、わが山東町で二回目の会合を開いた。今
 年は愛媛県双海町で開催され、ホタルグッズ
 の共同開発なども検討している。シエルパ会
 議の参加組織は固定されておらず、自由に参
 加できる。次回は、来年の二月ごろに福岡県
 上陽町で開催の予定だ。

山東町では十一年六月に環境基本条例を制
 定した。さらに、町役場が十二年ISO14
 001を取得するなど、環境に重点を置いた
 まちづくりを進めている。

ホタルはわが町の宝物である。宝物を磨く
 ことが、地域の環境を守り、地球規模で環境
 を考えるきっかけづくりとなっている。

住民と行政が互いに知恵を出し汗をかき
 「ホタルまつり」をつくり上げていくことが、
 山東町のまちづくりにつながっている。

昆虫

動物・生き物
による
まちづくり⑦
山口県むつみ村

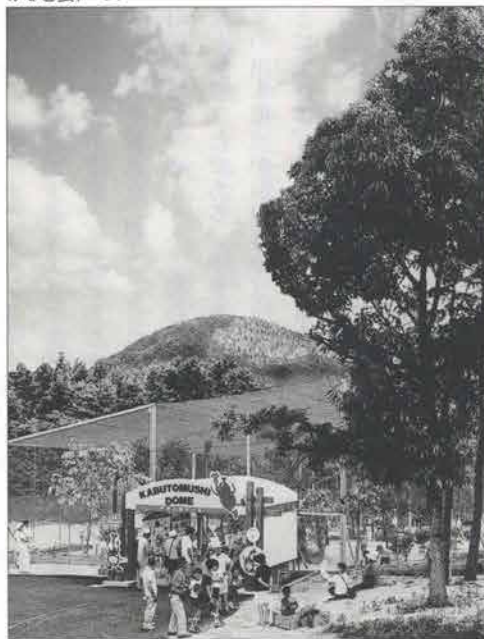
むつみ村は山口県北部に位置し、中国山地の山々に囲まれた二つの盆地から成り、中央を蔵目喜川が流れる自然環境の豊かな農山村である。農耕・畜産の連携による、良質米、特産野菜、肉用牛生産を組み合わせた複合経営で効果を挙げている。

事のはじまり

平成四、五年だったと思う。オオクワガタの生態が解明され、全国で何人かが飼育に成功されたことを風の便りに聞いたことが昆虫に取り組み始まりました。

むつみ村には、これといった観光資源はなく、従来いろいろな形で都市交流を行ってきたが、活性化にはつながらなかった。山口県と島根県をつなぐ山陰屈指の観光ルート萩・津和野のちょうど中間に位置しており、国道九号線と村を縦断する県道萩津和野線の改良工事で、二、三年でむつみ村が観光コー

かぶと虫ドーム



スになると想定された。

八年に企画調整課へ異動となり、カブト虫で「村おこし」という以前からの考えもあり、萩・津和野間の観光バス通行量調査を実施した。五月の大型連休、七、八月の行楽シーズンに行った結果、むつみ村を通過する観光バスは日にわずかに一、二台で、大部分は国道九号線経由。しかし、この萩・津和野間の工事が竣工したら、いかにして一台でも多くの車にむつみ村を通ってもらうかが都市交流施策の第一歩ではないかと考えた。

クワガタの入手

むつみ村だけで「昆虫王国」を立ち上げて誘客するより、萩・津和野間の沿線市町村にも呼びかけて、観光資源の共有化を図ることが有効と考え、村の受け皿対策としては、総合案内板、萩・津和野への誘導サイン塔の設置、また景観整備事業として、ログ風バス停の新設、路側帯の整備などを三年がかりで行った。一番重要でネッ

クとなっていた国道九号線からむつみ村への誘導表示が県、建設省から認められた。

「むつみ昆虫王国」の設立準備は、県をはじめ関係者から、豊かな自然環境を保全・創造していく企画であるとして、萩・津和野間の沿線市町村のPRビデオの制作、広島・北九州のテレビ局への放映など、県関係者の多大なバックアップがあった。

村の中央には、新生第四期の時代、火山活動によって形成されたシンボルの伏馬山があり、火口跡周辺にバンガロー、ふれあい広場、

自然を生かして昆虫王国建設 道路沿線の景観整備を重視



むつみ村企画調整課長
山本英昭

ウッドステーションなどの野外活動施設を整備した。問題はオオクワガタの入手。後に昆虫王国の国王になった前助役に相談に乗ってもらい、近県で飼育に成功した人を探してもらうよう依頼した。早い時期にその人と接触することができ、村とのアドバイザー契約を行い、王国建設に向け本格的整備に取り掛かった。組織づくりは林業団体の「むつみ村林業振興会」を母体に「むつみ昆虫王国」を旗揚げすることにした。

施設のオープン

クワガタ類は、業者からの委託販売で、カブト虫については、自家生産するかたちで役場職員が千二百匹の幼虫を準備し、飼育を開始した。施設としては、「クワガタの館」、「一・五の「昆虫の森」、特産品販売、テントでの食堂を設置し、十一年七月十日にオープンした。

また、八十、一千万円のオオクワガタをどこかの社長さんが買った買わなかったのニュースも飛び交い、これらが追い風となつて、その年はオオクワガタフィーバーとなった。名古屋、広島、福岡、鹿児島からも来村があり、虫の数よりお客さんの数が上回った。

一方、村内のガソリンスタンドでは、道案内と給油で列ができ、役場にも問い合わせの電話が殺到し、職員は対応に追われて仕事に

ならない日々が続いた。国道九号線の標示も効果があった。中国自動車道のサービスエリア、通過沿線の各道の駅、小郡駅などからもパンフレットの請求が相次いだ。

シーズンを終えた時点で、二十一世紀未来博覧会（きらら博）協会から、ぜひ博覧会に取り入れたいとの申し出があった。

昆虫に関する知識と「虫がいない」という苦情対策として、カブト虫と自由に触れ合うことができる「カブト虫ドーム」を建設し、大型駐車場などの整備を計画した。

カブト虫ドームは、珍しい施設であると評価され、無償での設計、建設の申し入れがあるほど。事業費は単県補助で対応した。準備した一万二千匹のカブト虫の幼虫は村内から調達し、地場産業の振興を図ったが、購入後の幼虫の飼育にあたって、カラス、イノシシ、タヌキ、アナグマ、モグラ、ミミズなどの天敵対応を迫られ大変苦労した。

カブト虫の寿命は約一カ月で、交配するとまもなくして死ぬこともあり、ドームに随時生息させなければならぬので、促成・通常・遅延飼育を行う研究棟が必要となった。

クワガタの館では、飼育したオオクワガタや、規制緩和で輸入許可されたヘラクレスなど外国産昆虫の生息展示場と販売所を新たに設けた。

昆虫の森には、前年の昆虫が産卵・繁殖で

きるよう畑を設け、森内で自然羽化させ、他地域に逃げないよう餌付けを行った。また、周囲の昆虫を呼び寄せるため夜間のライトアップ、特殊な匂いでのトラップを仕掛けた。

今後の課題

集客も目標を突破し、特産品の売り上げも上々で村全体が活気に満ちあふれた。昆虫王国は村のシンボルひまわりロードと相まって、沿線市町村にも波及効果をもたらした。王国の経営方針は、あくまでも誘客で、王国自体の利益よりも地場産業・住民雇用に視点を置いている。

三年目の今年は、名古屋・広島・四

国・九州の旅行会社のツアー企画が組まれた。

今後の課題は、団体客対応の食堂、王国で一日を過ごせるパークランドなどが必要だ。昆虫王国は行政主導型で生まれたが「お膳は据えても、箸までは持たせない」という方針を貫き、住民が考え、参加・実行する足腰の強い地域主体の村づくりを目指していきたい。



昆虫の森



内海英一

鳥取県企画部長

七月に鳥取県企画部に赴任して以来、見るもの・聞くもの、日々新たな発見の毎日を通して、鳥取県の住民参画型行政の取り組みについて、この場をお借りして紹介させていただく。なお、こんなことは既に私の地域でもやっており、特段目新しいことではないよというご意見が出るとすれば、筆者の不勉強によるものであり、また、日本の各地域の将来は明るいということなので、平にご容赦願いたい。

鳥取県の取り組みの特徴は、情報公開、住民の意見聴取といった従来のいわゆる「住民参加」とどまらず、「住民参画」を目指しているところにある。

たとえば、地方分権時代の教育の在り方を探る「二十一世紀の人づくり施策懇話会」は、委員全員を公募により決定。役所は、懇話会の審議には一切口を出さず、委員から要求のあった資料の収集・提供など事務方に徹する一方で、懇話会が取りまとめた提言を全力で、制度化・予算化し、実施する。この方式で、既に、平成十三年度には、子供の自主的・創造的な活動を支援する「子供いきいきプラン」

など三事業が具体化されている。

もう一つの例は、今年度の六月補正で創設した「中山間地域活性化交付金」である。これは、従来、ややもすれば行政主導型の箱ものの整備に偏りがちであった各種の補助制度をスクラップし、地域住民、すなわち現場に一番近い人びとが、自ら実践するための独創的な活性化計画に基づく事業に対し財政支援を行うものである。

とくにソフト面を重視し、地域住民が自主的に地域の抱える課題を把握・整理し、活性

住民参画型 行政の 実践

化策を練り上げていくために必要なワークショップの開催や住民の研修などに十分な支援が行われるよう工夫している。ここでも、役所は、金を出す、事業内容には口を挟まない。こうした住民参画型行政の取り組みは、役人が計画や施策を企画立案し、住民の理解・協力をいただきながら実施するといった従来の行政のベクトルを百八十度転換させるものである。行政マンの意識改革が必要であるとともに、主役である住民にとっても、主体的に地域のことを考え、積極的な参画を継続するには、多大なエネルギーが必要である。さらに、住民の主体的な活動を行政がきめ細かくサポートしたり、さまざまな状況下でコーディネートする新しい能力も必要である。

鳥取県では職員が、現地に赴いて、本音の声を聞き、先進事例や人材の紹介、住民研修の場を設けるなどの相談に応じている。また、関心の低い住民の声をどのようにして引き出すか、どのようにして積極的参画につなげていくかといった課題もあろう。

いずれにせよ、机の上で悩んでいても何も始まらない。こうした住民参画の取り組みが、試行錯誤を繰り返しながらも、目に見える成果を挙げることが起爆剤になり、県内各地で住民が元気に自信を持って地域づくりに取り組むことを目指していきたい。

動物・生き物
による
まちづくり



現役最強馬シマヅショウウレキ号



ばんえい競馬＝北海道市営競馬組合

「ばんえい競馬」は、2カ所の障害（山）がある200mの直線コースを使い、最高1¹/₂のソリを馬に引かせてその力を競い合うレース。世界でたった1つ北海道にしかなく、馬のパワーと持久力、そして騎手のテクニックが勝負を大きく左右する、ダイナミックでエキサイティングな競馬である。





国蝶オオムラサキ＝埼玉県嵐山町

自然の豊かな嵐山町では、オオムラサキの森や蝶の里公園を整備し、国蝶オオムラサキの保護を通して身近な自然とのふれあいを広げる場にしていこうと、官民一体となり、オオムラサキの棲む雑木林の維持・回復に努めている。近くにはホタルの里や緑のトラスト保全地もあり、これらが一体となって豊かな自然環境が維持されている。



ボランティアによる越冬幼虫調査



あっさり味のスッポンラーメン



スッポン養殖＝埼玉県湯田町
平成三年から、観光郷土料理の開発ということでスッポンの養殖を始めた。
通常自然界では、四、五年かかるところを温泉を使い水温を保つことで冬眠させず、約二年で出荷できる。当初は、町内旅館・食堂などでスッポンをさばける人がいなく、料理講習会を開き勉強した。今では、需要も多くなり、「温泉育ちのスッポン」として定着している。



とらふぐの養殖



若狭とらふぐ王国＝福井県小浜市
若狭小浜は、海あり山あり歴史あり、何といってもうまい食へ物あり、心も体も安らぐところである。
中でも、冬季になるとほっぺが落ちるくらいうまい「とらふぐ」が自慢。「てっさ」「てっちり」「焼きふぐ」「唐揚げ」「ひれ酒」そして最後の「ふぐ雑炊」まで、おなかいっぱいになるまで堪能できる。



国際カジキ釣り大会＝静岡県下田市

昭和53年、東京・三宅島で数チームの愛好者が集まり開催した「第1回 東京トロリングフェスティバル」。その後、参加者が増え、大会の名称も「ジャパンインターナショナルビルフィッシュトーナメント＝JIBT」と変更し、60年の第7回大会から開催地を現在の下田市に移した。今年には96チーム、約600人が参加する世界最大級のトーナメントに成長した。



はたるいか水揚げ量
日本一＝兵庫県浜坂町
ほたるいかは栄養価抜群で、ビタミンA、Eはウナギなみに豊富に含み、カロリーは半分以下。低脂質でEPA、DHAの比率も高く大変な優れたもの。調理方法も多彩で、「ほたるいか料理百選傑作集」も製作されるほど。また、春には「浜坂みなとほたるいかまつり」が開催される。



トカラヤギ＝鹿児島県十島村
トカラヤギの飼育は、平成九年から進めており、十一年には、多頭飼育のできる本格的な畜舎を整備した。現在は、ペットなどの目的での生体販売や食用ヤギ肉（イベント時のみ）として、販売している。これからの積極的に生産に取り組み、商品の開発や販路の開拓を行いたい。



ニタリクジラのブリーチング(ジャンプ)

ホエールウォッチング＝高知県大方町

四国の西南部に位置する高知県大方町の沿岸海域では、体長10m前後のニタリクジラが泳いでおり、ほぼ1年中その姿を見ることができる世界でも数少ない場所の1つだ。ニタリクジラの雄大な姿に、ホエールウォッチングに訪れる人びとのだれもが感動を覚え、ゆったりとした時の流れを感じる。



小泉八雲も愛したふるさととの海

大層に言うなら、私たちは人びとの暮らしに一番近いところで、その息づかいを感じ取りながら新聞を作っている。地方紙の誇りであり、自信である。子や孫たちが豊かに、幸せな暮らしができるよう、常に未来思考を忘れないようにしている。

社会資本の整備はまさに未来思考で、子や孫たちの時代のために備える大事業だ。その



静岡新聞社常務取締役

原田誠治

思いがぶれていては、人びとの暮らしを豊かにするどころか、むしろしてしまふ。

時折、ふるさと焼津の海に出て、そのことを考えることがある。

焼津の海といえば、忘れることができない人がある。ラフカディオ・ハーン、小泉八雲である。明治三十年八月、東京帝大英文科講師だった八雲は、家族や書生を伴って、初めて焼津にやってきた。もちろん海水浴をするためだった。

海が深く、白い波が打ち寄せる焼津の海は、八雲が生まれ育ったギリシャのレフカダ島の海によく似ていたからである。

八雲の作品の一つ「乙吉のだるま」でおなじみの山口乙吉という、好奇心の強い、お人好しの協力者と出会って、焼津が好きになった。それから、夏のたびに焼津にやってきた。焼津に住み着いたこともある。

八雲は焼津で海にまつわる作品をたくさん書き残した。

随想「焼津にて」の中で、「焼津というこの古い町は、太陽がカツと差すと、妙に中間色のおもしろ味が出てくる町だ。入り江に沿う白茶けた荒磯の色がまるでトカゲのような色を帯びてくる」と書いている。雲の流れが作り出す日影が、トカゲが走るように、浜辺を動くさまが目映る。

小さな漁村にすぎなかった焼津の名が、八雲のふるさとを思う気持ち、望郷心のお陰で世界に広まった。今風にいえば、八雲は偉大な「ふるさと大使」だったのである。

でも、今、ふるさとの海には青い海も白い波のかけらもない。

立つべき海岸も浜辺もない。あの白い波が打ち寄せていた磯は埋め立てられ、魚の水揚げ場、漁船の係留場に様変わりしている。

辛うじて潮騒が聞けるところは三方に手足を突き出したテトラポッド群である。その向こうにはさらに消波ブロックの列である。その光景は、まるで海が鎧を着ているようである。

波頭をすべるヨットも、ゆったり航行する外国船も、テトラポッドの額縁では台無しである。

よそのことだが、公共事業で排出される土砂、いわゆる残土の処理に困って海を埋め立てるといふ、気になる話も聞こえる。

♪海は広いな、大きいな、行ってみたい、な、よその国。八雲ではないが、海はだれにも心のふるさと、あこがれである。

海も自然も地球からの借りものだということを忘れてはならない。

住民の心とぶれない公共事業を

闘牛

動物・生き物
による
まらづくり⑧
愛媛県宇和島市

サミット協議会

世界的に有名なスペインの闘牛は別として、牛と牛が闘う闘牛も、スイス、トルコ、ジャワ島、韓国など世界各国に伝承されており、このことから闘牛の起源が牛の本能による自然発生的なものであることが分かる。牛のいるところ闘牛ありき、である。

日本では、北は岩手県から南は沖縄県の各地に伝承され、昭和五十年代までは東京・八丈島でも闘牛が行われており、娯楽の少ない辺境の地に、今にいたるまで残ったものと思われる。

平成十年八月、島根県隠岐郡西郷町の提唱で発足した「全国闘牛サミット協議会」は、岩手県山形村、新潟県的小千谷市と山古志村、島根県隠岐島の西郷町・五箇村・都万村、愛媛県宇和島市、鹿児島県徳之島の伊仙町・天



一刀彫りの郷土玩具

城町・徳之島町、沖縄県の具志川市と石川市、以上六県十二市町村から成り、現在、日本で闘牛が行われているほぼ全域である。

ところで、「闘牛」という名称が

初めて登場するのは明治時代の公文書だが、宇和島地方ではひと昔前までは「突き合い」というのが一般的呼称だった。現在も小千谷市と山古志村では「牛の角突き」、隠岐では「牛突き」と呼んでいる。

格闘時間は無制限だが、戦意を失って逃げたほうの牛が負け。瞬時に決着が付く電撃戦もあれば一時間に及ぶ持久戦もあり、激闘二時間四十分という最長記録も伝えられている。なお、小千谷市と山古志村の「牛の角突き」は興行ではなく神事のため、勝負をつけずに引き分けにしている。

技の決め手は10種類

相撲の四十八手とまではいかないが、技も何種類があり、宇和島では十種類に分類している。ちなみに隠岐では八種類。勢子、という者が片手で首の付け根を押さえ、もう一方の手で肩をたたき、声を掛けて、牛を励ます。これも各地で形態が異なるが、闘牛には欠かせない「仕掛け人」である。

このように、日本の闘牛はスペインのそれとは異なり、いたって素朴だ。闘牛を初めて見た人が、何かしら郷愁を誘われるのは、日本人がもともと農耕民族であるゆえんであろう。

今日、牛が農耕用に使役されるのは祭事や神事のおかげだけである。闘牛には専用の牛が使われ、生産、購入、飼育、いずれの面においても一般の経済原理は通用しない。あくまで、趣味・道楽の世界であり、金銭的には報われない。したがって、サミット協議会加盟の十二市町村では、行政が何らかの支援や連携を行っている。

宇和島の闘牛は、江戸時代後期の享和年代には土俵を設けて本格的に牛の突き合いが行

闘牛のまちイメージ維持に腐心 観客と登録牛頭数増が課題



宇和島市商工観光課係長
神應幸男

われたといわれており、明治、大正、昭和と庶民の娯楽として親しまれてきた。この間、賭博規制や動物愛護の観点から禁止が繰り返されたが、闘牛熱は一向に冷めることなく、興行的にも成熟し、大正期には遠征興行や他流試合が行われるようになった。

昭和二十三年の西宮球場への遠征興行、これに発想を得た井上靖の短編「闘牛」が、二十五年上期の芥川賞を受賞し、宇和島の闘牛が全国的に知られる契機となった。また、獅子文六が二十四年に発表した小説「てんやわんや」。これには宇和島市に隣接する津島町の闘牛風景が登場する。大ベストセラーとなり、映画も大ヒット、宇和島地方の闘牛を全国に喧伝することとなった。

衰退と復活

ところが、農業の機械化と都市化が急速に進んで、闘牛は衰退に向かい、三十年には闘牛大会が終息した。三十四年になって闘牛復活の機運が高まり、民間に委員会が組織されて闘牛大会を再開、四十二年度からは闘牛への市の助成が始まった。四十九年、官主導の闘牛経営が行われるようになり、翌五十年三月、宇和島市は全国に先駆けて全天候ドーム型の市営闘牛場をオープンさせた。

以後、闘牛は宇和島の観光の目玉として、年間十場所の定期大会、年間二百件を超える

観光闘牛（観光団体向けの模擬戦）を開催、かつてない盛況を呈した。

市が興行に直接携わるので、闘牛の専門用語にも戸惑うなど、当初は試行錯誤の連続。牛主の牛への愛着は想像を超えるものがあり、闘牛に対する独特の心情を理解するのに何かと苦労があった。

五十年代後半、牛の値段が高騰し、牛主の高齢化、飼育環境の悪化などによって闘牛飼育者が減少、国内観光の陰りから観光闘牛が激減するなど、闘牛経営はしだいに衰微に傾いた。しかし六十年、民間主導の「宇和島観光闘牛協会」が闘牛経営を継承、運営については宇和島市観光協会と連携し、助成金は従前どおり市が交付を続けることとなった。

希少な伝統文化

現在、定期大会は年間五場所、観光闘牛も年に数十件、最盛期とは比べくれない状態だが、最大の懸案は闘牛愛好者の高齢化による定期大会の観客減で、新たな観客層の掘り起こしが課題となっている。

折しも宇和島城築城四百年記念にあたる平成十二年、「第三回全国闘牛サミット・全国闘牛大会」を宇和島に招致し、十一月十二日、全国関係市町村および関係団体が一堂に会し、関係課題について協議したほか、沖縄、隠岐、徳之島などから招いた名牛六頭と地元

牛との手に汗握る熱戦が行われた。

遠隔地からの闘牛関係者はもちろん、県外客や若い世代の観客も多く見受けられたが、闘牛の再評価や新たな闘牛ファンの拡充につながり、これ以後、定期大会の観客は増加傾向にある。

とはいえ、闘牛が抱える問題は依然として深刻なものがある。近年とみに牛の大型化が進み、一トを超える牛が珍しくなくなつたが、大型牛は一度出場すると長い休養期間が必要となり、このため牛はつねに不足気味となっている。観客動員の強化だけでなく、登録牛を増やすことも当面の重要課題である。

宇和島の闘牛（愛媛県南予地方の闘牛習俗）が文化庁から七年十一月、「記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財」に選ばれ、四国では唯一の希少な伝承文化になっている。市財政も非常に厳しいが、適正な行政支援を続けることで、先人によりはぐくまれた「闘牛のまち・宇和島」のイメージを守って

いきたいものである。



全国闘牛大会

ムツゴロウ

動物・生き物
による
まちづくり⑨
佐賀県芦刈町



シンボルマークの「ムツゴロウ」登録商標がされている

まれた自然と資源を生かした農業、漁業を基幹産業とする食糧生産基地である。人口は約六千八百人。

干潟の愛きよう者

有明海は満潮時と干潮時の潮位差が実に六メートルと日本で特異な海である。干潮時に現れる広大な干潟にここ独特の動植物が生育する。中でもムツゴロウは、有明海を代表する珍魚である。ハゼ科に属し、泥深い干潟に約一メートルほどの縦穴式の巣穴を掘ってすんでいる。体長は約二十センチで、黒緑に紫がかった色をしている。魚でありながら大きな目玉をバ

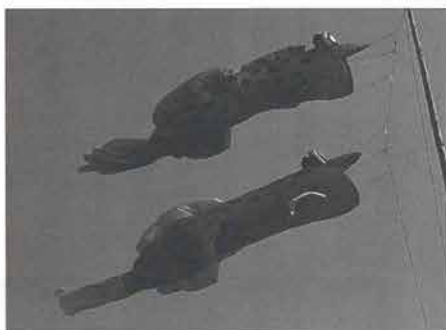
チャリさせて干潟をはい回り、時には空中に大きくジャンプする。ユニークで華やかな生態は、干潟の愛きよう者として人気抜群。

芦刈海岸は世界で唯一、ムツゴロウ、シオマネキの保護区に指定され、塩生植物シチメン草など、自然観察が楽しめる希少生物の楽園になっている。朝と夕とでその景観が一変する有明海。そしてムツゴロウとの共生を地域づくりの原点として「生活と自然を大切に

町のシンボル

ムツゴロウは、農業や乱獲などで一時期絶滅寸前まで減少した。しかし、県が芦刈海岸の約四・五キロをムツゴロウの保護区に指定したことと、有明水産振興センターによる稚魚の放流が功を奏して生育数が増え、今ではユ一モラスな姿を間近に見て楽しむことができ

る。町のシンボルとして定着しており、これを全国にアピールしていくことが「芦刈らしい」まちづくりを進める基本戦略になると確信している。そして芦刈を全国に情報発信するため、「生活と自然を大切にするムツゴロウ王国」をまちづくりのキーワードに掲げ取



(上)ムツノボリ (下)求愛するムツゴロウ



り組んでいる。

本町には、地域づくり団体としてムツゴロウ王国振興協議会がある。同協議会は、自然環境の保護、保全の機運が高まりをみせる中、活力ある産業の振興と地域間交流および生活文化の向上を図る目的で、平成五年四月に設

生活と自然を大切に するムツゴロウ王国 小さな町が大きな夢に挑戦



芦刈町地域振興課長
水田常久

立。町内の各種団体や趣旨に賛同する個人会員で組織し、人材育成、環境保護などの活動を展開している。

主なものとして、毎年四月開催される「ムツゴロウまつり」や、毎年旧暦の六月十九日、町最大の伝統行事「沖の島参り」に合わせ実施される豪快な打ち上げ花火、女性太鼓浮立など有明海沿岸で中心的イベントになりつつある「ムツゴロウ王国夏まつり」などに参加している。

また、北海道中標津町や各地の地域づくり団体などとの交流によってまちづくりリーダーの育成を行っている。その一環として、各種団体や各年代層からの参加を得て行う夜なべ談義など地域に根ざしたイベントを実施している。

商標登録

ムツゴロウの保護区指導員（五人）を八年四月に新設し、環境保護活動および啓蒙活動の先導的役割を担っている。地域づくりは、女性の積極的参加が不可欠のため、町のシンボルマークの入ったユニフォームを町内の女性を対象に千二百着づくり、イベントの際に着てもらっている。

また、ムツゴロウの愛称を「ビヨント」と命名（商標登録）し、名刺やステッカーを作って町内各家庭に配布したり、さらに、鯉の

ほりならぬムツノボリ（意匠登録・商標登録）を作り、ムツゴロウが見られるシーズンに町内に掲げている。今では「ムツゴロウと言えど芦刈」「芦刈と言えどムツゴロウ」というイメージが定着している。

一方、産地間競争の激しい農水産物の販売拡大とブランド化を推進するために観光物産キャンペーン推進協議会を立ち上げ、観光と物産の振興を図っている。漁協においても、青年部などを中心に地域ブランド化の一環として、塩ノリやモ貝（赤貝）の缶詰をムツゴロウ王国ブランドで販売し、大好評を得ている。周年漁業につなげる試みとして続けた、ムツゴロウの試験養殖は三度目の挑戦で、課題であった越冬についてもなんとかクリアし、今後の新しい展開が期待される。

YASSAI隊

本町は、全国平均に比べ高齢化が進み、地域づくりに参加できる人が限られていること



YASSAI隊

から、今年新たにヨサコイソーラン踊りのグループ「YASSAI隊」（約六十人）が発足した。最高齢者七十二歳を含む四十代を中心としたダンスチームが町の応援歌に合わせ、ヨサコイに取り組む姿は、なかなか元気がいい。

地域づくりに新しい風を吹き込む女性パワーはすごい。老いも若きも、楽しんで参加する姿が本町の地域づくりではなかるうか。

まちおこしと言え、新しい施設を建設したり、派手なイベント事業に意識が向かいがちで、今日までこのような取り組みが多く見受けられた。しかし、重要なことは足元にある地域資源を掘り起こし、町の歴史とよき伝統を生かすことではないだろうか。「地域資源・歴史・伝統」をきちんと位置づけることが必要だ。芦刈町には、ムツゴロウという地域資源や、安定した農業生産を営んできた干拓の歴史がある。

町民一人ひとりが身近な資源・歴史を再評価し、積極的に保存・活用すること、その中で自分の役割を自覚しながら行動するとき、自分自身が輝き、地域全体が輝いてくると思う。他に模倣できないオリジナリティを演出しながら、二十一世紀にむけてムツゴロウ王国建設という「小さな町の大きな夢へのチャレンジ」ムツゴロウ王国芦刈の楽しい夢が広がっていく。

平成14年度

地方行財政重点施策について

地方行財政重点施策は、総務省が重点的に推進しようとする地方行財政分野の施策についてまとめたものである。地方財政措置を伴う施策についても、年末に決定される地方財政対策の内容を踏まえ、その内容が固まるが、各地方公共団体における翌年度の施策の企画立案や予算編成を行う際の参考になるよう、国の概算要求に合わせ、地方行財政施策についての基本的な考え方を明らかにしている。

今年度は、総務省となつて初めての重点施策の作成となった。総務省関係の重点施策は、まず、概算要求関係資料として省全体についての「平成十四年度における総務省の主要政策」をまとめ、そのほかに、地方行財政分野について「十四年度地方行財政重点施策」「地方行財政の新たな展開」と、国・地方を通じて講ずべきIT施策について「IT政策大綱」をとりまとめた。

十四年度の地方行財政重点施策は、まず、地方行財政をとりまく環境の変化と新たな課題を踏まえ、地方行財政についても構造的な改革が求められており、地方分権の一層の推進と地方行政体制の整備を進める必要があることを指摘したうえで、以下のとおり、五つの柱にそつて重点施策をとりまとめている。

第一 市町村合併と地方行政の構造改革

地方分権の一層の進展を図り、地方行政の構造改革を推進するためには、住民に身近な総合的な行政主体である市町村の行財政基盤を強化することが不可欠である。与党の「市町村合併後の自治体数を千を目標とする」という方針を踏まえて、市町村合併特例法の期限である十七年三月までに十分な成果が挙げられるよう、「市町村合併支援プラン」に盛り込まれる各省庁連携施策などによ

り、自主的な市町村合併をより一層強力に推進する。

さらに、地方分権や市町村合併の推進を踏まえた新たな地方自治の仕組みについて、自治行政局長の諮問による研究会などにおいて検討するほか、地方分権改革推進会議での検討に合わせ、国と地方公共団体との役割分担に応じた事務・事業の見直しおよび地方税財源の充実確保並びに行財政改革の推進など行政体制整備の課題に取り組む。

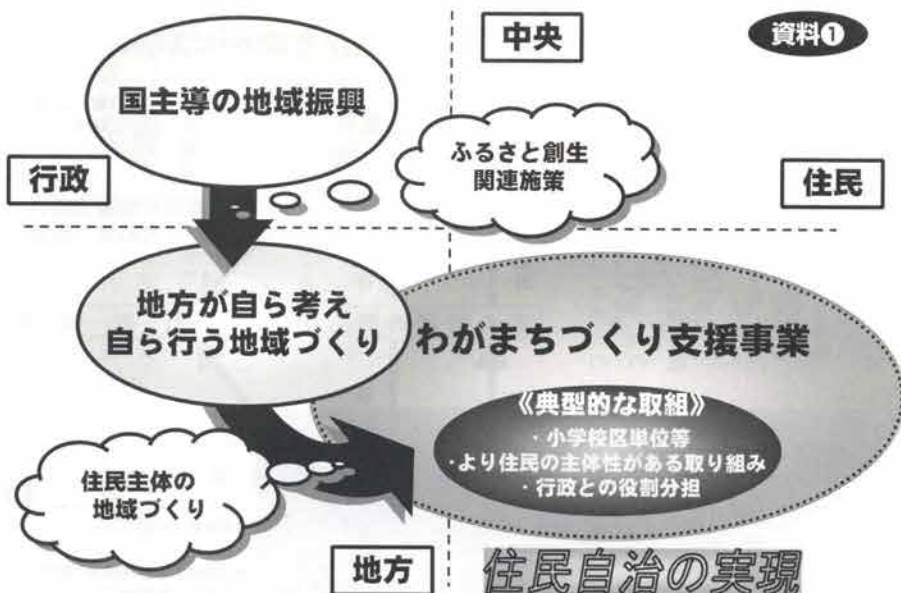
また、地方公共団体の自主的かつ主体的な行政改革の一層の推進を図るため、事務事業の見直し、組織・機構の簡素効率化、地方公社・第三セクターなどの経営健全化、定員管理・給与の適正化などを行う。このほか民間企業における経営理念・手法などを公的部門にも導入することにより行政部門の効率化や透明性の向上を図る新しい行政手法（ニュー・パブリック・マネジメント）の

第二 地方税財政の構造改革

推進を図る。民間委託およびPFI、行政評価などの円滑な導入を促進するとともに、監査機能および住民による監視機能、情報公開制度などの一層の充実、さらにはパブリックコメント手続きの導入や新たな財務会計制度のあり方の検討に取り組む。

地方分権のさらなる推進を図るため、地方財政についても、「地方にできることは地方に委ねる」との基本的な考え方に基き、歳入・歳出の両面において地方の自由度を高め、地方の自立に向けた構造改革の実現に取り組む。また、国・地方を通じて厳しい財政状況を踏まえ、お互いが協力して徹底した行財政改革に取り組むことにより、国・地方それぞれが歳入全般を見直し、財政の健全化を図る。

歳入面については、地方分権の一



層の進展を図り、地方における受益と負担の対応関係を強めるといふ観点から、自主財源である地方税の地方歳入に占める割合を高め、国からの移転財源への依存度をできるだけ少なくする。そのため、税源の偏在性が少なく税収の安定性を備えた地

方税体系の構築に向けて、税源移譲を含む国と地方の税源配分の見直しなどにより地方税源の充実・強化を図る。

具体的には、公正で活力ある社会を実現するため、厳しい地方財政の状況・少子高齢化の進展に適切に対

応し、個人および法人がその受益に応じ、薄く広く負担を分かち合う税制の構築を目指す。

このため、法人事業税への外形標準課税の早期導入を図る。また、個人住民税についてもその充実を図るほか、地方環境税制の検討を進めるとともに、地方公共団体の課税自主権の活用にかかる取り組みに対して必

要な支援を行う。

地方交付税については、財源調整や財源保障の機能を適切に果たすことができるよう所要額の確保を図るとともに、地方公共団体の自主的な財政運営に資する方向で算定の簡素化・合理化を図る。

一方、歳出面については、国の施策に関連するものが地方の歳出において大きなウェイトを占めていることを踏まえ、国庫補助負担金や法令による国の関与の廃止・縮減の見直しを行い、地方歳出の自立性向上を図るとともに地方歳出の効率化を目指す。このため、国庫補助負担金については、地方分権推進計画に沿って、国庫負担金と国庫補助金の区分に応じて、積極的に整理合理化を推進する。

第二 地域の活性化と多様性ある国土づくり

地方分権の進展に伴う地方公共団体の役割の増大、地域活性化の必要性などを踏まえ、個性と活力のある地方の構築を目指すため、引き続き、地域の発想と住民の積極的参加に基づく自主的・主体的な地域づくりを進める。

身近な行政需要に対して、住民自

らの直接参加によって対応する住民主体のまちづくりへの取り組みを促進する。このため、それぞれの地域の歴史と伝統に誇りを持ち、住民が中心となつて個性ある地域づくりに取り組む「わがまちづくり」への取り組みを促進する（資料①参照）。

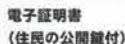
また、快適で活力があり、歴史や伝統に基づく個性豊かな地域づくりによる多様性ある国土の形成を図るため、都市や農山漁村などそれぞれの地域が有する特性を生かしながら、都市基盤・産業基盤の整備を進め、過疎地域の活性化および国土・環境保全の多面的機能の維持・向上を図る。

そのほか、科学技術振興のための取り組み、地域の自立・活性化のための人材育成・確保、循環型社会の形成、共生のまちづくりを推進することとしている。

第四 I.Tを活用した住民生活の向上と地域の振興

だれもがI.Tを利用できる社会の実現に向けて、情報通信ネットワーク上での情報の高度な活用を可能にすることで、地理的、年齢・身体的な条件などの要因によるI.Tの利用機会の格差が生じないようにする

資料②



備を推進する。政府も、総合行政ネットワークの構築および地域インターネットなどの地域公共ネットワークの全国的整備を推進し、教育・行政・福祉・医療・防災など、多種多様なサービスを提供して、住民の利便性の向上を図る。

そのほか、住民生活の利便性向上

写しの交付請求、旅券の交付申請、
地方税の申告並びに電子調達など住
民に身近な行政手続きについては、
住民が自宅や職場などから申請でき
るよう、システムの共同整備に配慮

住民基本台帳ネットワークシステム

促進する。

、必要があるため、情報システムの

入テム開発を行うための地方公共団

に固定資産税の路線価をはじめ、全

国的に利用可能な地域情報の共有化

第五
推進防

の支援を充実する。

災行政の積極的推進を図る。

応を進める。

な防災対策を推進する。

める。

④救急・救助の充実・高度化を図る。

時空を超えて万葉の世界へ



藤田和弘 奈良県立万葉文化館副館長

奈良大和路は、日本人の心の古典「万葉集」の中心舞台であり、奈良を対象に詠まれた歌の数が最も多く、県内各地には今も万葉集ゆかりの歴史的風土・景観が多く残されていて「万葉のふるさと」と呼ばれている。

奈良県では、この地域特性を生かして万葉集を中心とした古代文化の総合拠点機能を発揮しつつ、地域活性化への寄与を目指して万葉源流の地、明日香村で整備を進めてきた「奈良県立万葉文化館」がこのたびオープンした。

楽しみ、学べる3つの機能

万葉文化館は、万葉集を中心とした古代文化に関する「調査・研究」「展示」「図書・情報サービス」の三つの機能を備え、多くの人びとが訪れ、楽しみ、学ぶことができ、千三百年の時空を超えて万葉の世界を体験できる。

調査・研究機能は、「万葉古代学研究所」を設置して、万葉集の文化的意義をはじめ、万葉の時代の生活文化、経済、技術などを調査・研究

し、その成果をシンポジウム、公開講座、研究誌の発行などにより、広く一般に公開する。

展示機能（万葉ミュージアム）は、高山辰雄氏、平山郁夫氏、加山又造



当時の「市」を再現した一般展示室「歌の広場」

氏などわが国を代表する画家が万葉歌をモチーフに描いた万葉日本画を展示するほか、人形や映像、ジオラマ（幻視画）、音楽などさまざまな手法を用いて万葉の時代の暮らしや

万葉歌人などを分かりやすく紹介する一般展示や、敷地の文化財発掘調査で発見された富本銭など、国史跡飛鳥池工房遺跡の全体像を紹介する特別展示がある。

図書・情報サービス機能は、万葉集をはじめ古代文化に関する図書、資料を備え、広く情報を提供する万葉図書・情報室があり、図書の閲覧に加え、万葉集や万葉に関する情報が幅広く検索できるわが国初の「万葉百科システム」も利用できる。

周囲の景観と調和に配慮

敷地面積は約三万八千四百平方メートル、建物は展示棟と管理・研究棟から成り、地下一階地上二階、延べ床面積が一万一千九百平方メートルで三つの機能を担う部屋を効果的に配置し、展望スペースからは耳成山・香久山などを遠景に、飛鳥の里を間近に万葉ゆかりの景観を望むことができる。外観は明日香村にふさわしいかわらぶき、切り妻屋根に棟持ち柱、壁は校倉風の石張りなど日本古来の建築様式を取り入れ、周囲の景観と

の調和に配慮している。そして、周囲には約二万平方メートルの庭園を配置し、万葉集ゆかりの植物、歌碑、遺構の復元などに出合うことができる。また、ミュージアムショップやカフェもあって、楽しみやくつろぎ

にも配慮している。これらの施設整備の総事業費は展示経費も含め約百二十五億円。

万葉集の第一人者である中西進館長は、「万葉集は心の文化。脈々と地下水のように日本文化を潤してきた万葉の魅力が今求められている。これを広く発信する拠点として世界の人びとから愛されることを願ってやまない」と語る。多くの方々のご来館をお待ちしている。



地域活性化と交通改善に向けた 都市内物流インフラ整備の あり方に関する調査研究



中心市街地における 物流対策の重要性

近年、利用者のニーズに合わせて多様化し、また、時間指定納品など高度化する宅配便に代表されるように、市街地への貨物自動車の乗り入れが増加している。とくに市街地における商業活動は、集荷・配達業務の相当部分をトラック輸送に依存しており、今後もその傾向は強まることと予想される。こうした物流環境

の変化は、生活に便利を生み、商業活動の効率化を進める一方で、駐車帯の未整備に起因する路上駐車車によって交通渋滞を招くなど、道路交通面で大きな問題となっている。

これは、単に交通問題に限らず、郊外型店舗の移転進出を誘導し、市街地の空洞化を進行させるなど、地域振興の面でも大きな課題となっている。

このような問題を解消するため、財地域活性化センターでは、全日本トラック協会から委託を受けて、物流の側面から交通改善と地域活性化を目指した、都市内物流インフラ整備のあり方に関する調査研究を行った。

この調査では、物流事業者や地方自治体へのアンケート調査の実施により、都市における物流対策の現状を把握し、また委員会を設置して、市街地における物流対策のためのインフラ整備のあり方について検討した。

物流業者がらみた都市内 物流インフラに対する問題点

物流業者からの意見として、「荷さばき用の駐車スペースが十分確保されていない」「パーキングメーターの設置が少ない」といった問題点が指摘された。とくに定期的な集荷、

配達業務を伴う商業地域では、アーケード街の整備によって車両の乗り入れが規制されているにもかかわらず、商業用駐車スペースが確保されていないことから、路上駐車を余儀なくしなければならず、安心して駐車できるスペースが極めて不十分である、と指摘している。

行政における 都市内物流対策の現状

自治体側の対応はどうか。当調査では、人口十万人以上の自治体（二百四十九市区）に対してアンケート調査を行い、百六十二市区から回答を得た。

それによると、約六割に当たる九十六の自治体が、物流対策を重要な課題と位置付けており、とくに人口規模の大きな自治体ほど、その比率が高い。

また、市街地における物流対策に

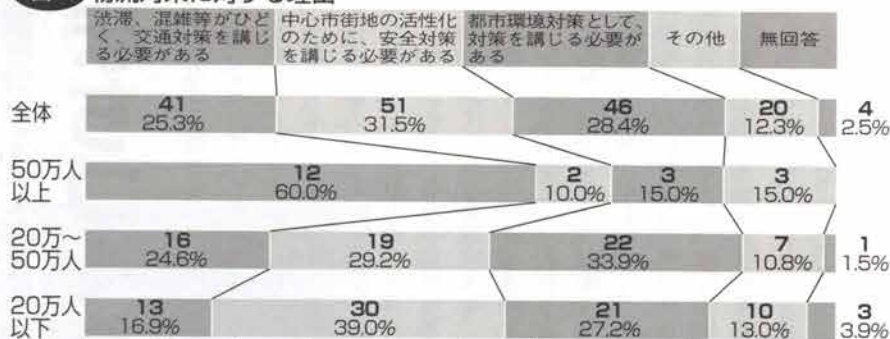
対策の種類

短・中期対策

長期的対策

ハード	社会基盤の整備	・ 共同荷さばき場 ・ ローディングベイ ・ 貨物車専用パーキングメーター ・ 駐車禁止指定の解除	・ 地下駐車場ネットワーク ・ 地下物流システム
	建物に対する付置義務		・ 荷さばき駐車施設
ソフト	物流活動のルール化	・ 荷さばき作業時間帯の設定 （タイムシェアリング） ・ パーキングメーターの運用 ・ 取り締まりの強化	
	荷主や物流事業者の自助努力	・ 共同集配 ・ 時間指定配送など物流条件の見直し	

図1 物流対策に対する理由



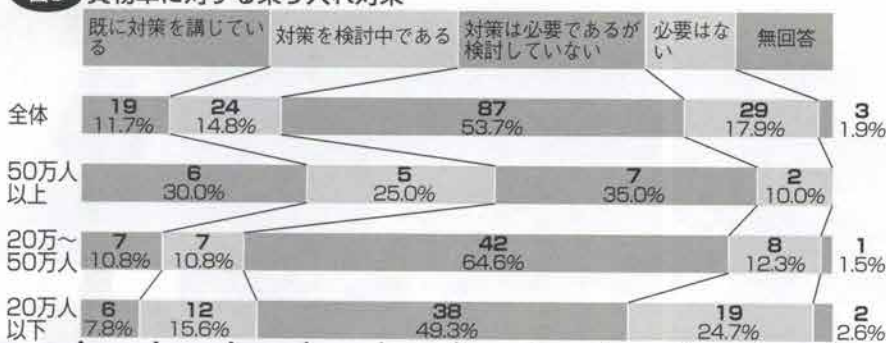
ついで、人口五十万人以上の市区では、「交通渋滞を解消するために対策を講じる必要がある」という回答が六〇%を超えたのに対し、人口二十万人から五十万人の市区では、「都市環境対策」として、また人口二十万人以下の市区は、「中心市街

図2 乗用車に対する乗り入れ対策



地活性化」のために安全対策を講じる必要があるという回答が最も多く、人口規模による取り組み目的の違いが明らかになった(図1参照)。中心市街地における交通対策として、半数以上の市区が「路上駐車」を問題としているが、実際の対応策

図3 貨物車に対する乗り入れ対策



をみると、乗用車に対する乗り入れ対策が、検討中を含めて五割を超えている。これに対して、貨物車の乗り入れ対策を実施している市区は、検討中を含めても二六%に過ぎず、貨物車対策を講じようとする自治体が極めて少ないことが分かつ

都市内物流インフラ整備のあり方に対する提言

た(図2・図3参照)。これは、組織のなかに物流担当セクションがあると答えた市町村が、わずかに十一市区に過ぎないことが物語るように、地方自治体の組織体制として、物流対策担当セクションを設置していないことも、その一因と推測される。

実際に、行政の組織内に物流専門のセクションを置くことは課題が多いと思われるが、全国には、「建築物における荷さばき駐車場の付置義務条例化」や「貨物車専用パーキングメーター、トラック専用駐車帯の設置」など、物流対策を講じている事例も見受けられる。また、松山市のように商業地における交通改善実験を住民参加によって取り組むところもある。

市街地の活性化に当たっては、交通改善策を踏まえて対応するのはもちろんのこと、とくに商業活動を支えるために物流的な視野にたつて、インフラ整備を図ることが、今後の市街地の活性化方策に求められている。

副参事 木村恭一
(地域活性化センターコンサルタント業務課)

まちづくりで検討委設置



大島直行

北海道伊達市文化財課長

伊達市は、仙台藩亘理一門の集団移住によって開かれたまちで、武家文化のたえずまいが色濃く残る。

一方、アイヌ文化や縄文文化など移住団以前の文化財にも見るべきものがある。とくに噴火湾の沿岸は縄文遺跡の宝庫で、本市の史跡北黄金貝塚はその代表的な遺跡である。

伊達市は、こうした縄文遺跡をまちづくりに生かそうと、さまざまな取り組みを行ってきた。史跡公園の整備は三年前から着手して、この六月にオープンした。シンボジウムや講演会も数多く行った。民間団体の「縄文まつり」もこの支援活動として毎年行われている。そして、今年、伊達市が官民共同で取り組んだのが、「だて噴火湾縄文フェスタ」である。

サミットがきっかけ

フェスタ開催のきっかけは、「縄文シティサミット」の今年度の開催地が当市に決まったことだった。

サミットは、全国の縄文遺跡を抱える都市が協議会をつくり、遺跡を

生かしたまちづくりを考える会議である。青森市が呼びかけて、現在十五の都市が加盟している。

今回のサミットは四回目で、北は特別参加の北海道虻田町から南の鹿児島県分市まで十五の都市が参加して七月二十六日行われた。コーディネーターはNHK解説委員の毛利和雄氏が務めた。哲学者梅原猛氏の特別講演に続いて、縄文を生かしたまちづくりの実践例や財政難時代の史跡整備方法について、活発な意見交換が行われた。

ミュージカル

サミットを盛り上げたフェスタは、サミット決定と同時に企画委員会がつくられ、イベントの目的に「明日を担う子供たちに縄文を正しく引き継ぐ」ことを盛り込んだ。また、委員会で強く打ち出されたのが官民共同の実行委員会づくりである。最終的には、市民を中心に約二百人で組織された。

フェスタはサミットを挟んだ前後十日間にわたり、全部で十九のイベ



最終日の縄文まつり



北の縄文人展

ントが企画された。実行委員会は七つの部会に分かれてこれらのイベントに取り組んだ。オープンング部会の縄文ミュージカル「まほろば」は北黄金貝塚を舞台に、青年が本州の文化を集落に持ち帰ったことから起こった事件を通じ、人間と自然の共生を訴えた。展示部会の「北の縄文人展」や「アイヌ工芸展」はこのフェスタの目玉で多くの見学者が訪れた。数多くの講演会も市民を大いに啓発した。最終日の「縄文まつり」は、文字とおりフェスタのフィナーレを飾った。

このほか、宣伝を一手に引き受けた市民啓発戦略会議や裏方の総務部会など、とにかく官民の歯車が実に良くかみ合い、関係者の多くがイベントの成功を肌で感じ取った。

そして今、新たに「まちづくり検討委員会」が組織され、このイベントの総括と同時に、縄文を生かしたまちづくりのさらなる可能性が話し合われている。もちろんこれも官民共同の作業である。

泥んこになり農業体験を楽しむ



吉野文夫 熊本県産山村企画・観光課長

かつては、日本の農山村において、当たり前の風景だった棚田。傾斜地に階段状に造成された水田で、「千枚田」とも呼ばれ、産山村にも、山間にその原形をとどめながら数多く残っている。

棚田には清流が流れ込み、昼夜の温度差も大きいことから害虫も病気も寄せ付けない。本来のうまい米ができる。そんな産山村の農村風景と、

田んぼを守る農家の現状を見てもらおうと、七月八日に「全国たんぼ選手権大会inうぶやま」を開催した。

産山村は、熊本県の最北東部にあり、阿蘇外輪山と九州の屋根と称される「久住山」とのちょうど中間に位置し、大分県と境を接している。

「池山水源」は環境庁（現環境省）から全国名水百選に選ばれ、自然や素朴さを求め村を訪れる観光客も多

お年寄りの指導で田植え体験



あぜ塗り実演



野良着ファッションショー

く、その数は年間百万人にも達する。しかし、観光だけでは村民との接点も少ないことから、お互いが積極的になる機会をと、今回のイベントは村の企画観光課が中心となって企画した。地区の老人会、地域活性化を目指す「グループ21」、阿蘇地域環境デザインセンター、役場職員など十四人で実行委員会を組織した。

「水漏れを防ぐあぜ塗り」は都会の人には無理だから実演にしよう。昔とったきねづかで老人会が受け持つ「昔の野良着のファッションショー」をやりたい」「昔の農機具を集めての展示会を」とか「すべて昔風

に、半端でなくやりたい」といった熱のこもった議論が続いた。苗は21の会員が、昔ながらの「折衷苗代」で手植え用苗を作った。

参加者はインターネットで公募し、福岡など県内外から約百三十人だったが、わずか十三軒の休耕田の周りは、ごった返すほどの盛況ぶりだった。

参加者はほとんどが家族連れだったが、中には地元、熊本大学のゼミのグループも。老人が見本を示すあぜ塗りに、飛び入り参加した者が慣れない手つきで鍬をもつ光景が見られた。「たんぼ選手権」のメインイベントは「たんぼそり引きレース」と「たんぼかけっこ選手権」。

そり引きでは、レースに気を取られ子供を振り落としてくる親や、体重でそりが沈んで動かない状況に、会場は爆笑の渦となった。折り返し地点に置いてある大根をとってくるかけっこレースでは、タイムこそ取らなかつたが、大人や子供は泥と格闘し、観戦する人も飛び跳ねる泥をかわしながら楽しんでた。

参加者からは「来年も続けてほしい」「米づくりの大変さを実感した」といった声が相次ぎ「もしやるとしたら、五月末ごろ（企画観光課）

お年寄りたち

も主役となる一方で、イベントの運営を積極的になし、都会の人びとも山村の未知の部分にまで触れるまたとなない機会となつたようだ。

地域づくり団体探訪 すかんぽの会……………石川県志雄町

志雄のボランティア劇団

志雄町は、石川県の中央部、能登半島の基部でいわゆる口能登の南部に位置する、人口約七千五百人の農工一体となった個性豊かな町である。また昔、越中と能登国を結ぶ宿場町として栄えてきた町であり、今は桜の里づくりに取り組んでいる。

春は桜、夏は海、秋は紅葉、冬は

時の話題を
寸劇にして
分かりやすく、
楽しく、
町民に紹介

雪など四季折々のさまざまなふるさとの表情を醸し出しながら、人と人、人と自然の触れ合いの場をさりげなく演出してくれる。

とくに今浜から出浜、千里浜まで全長八キロに及ぶ天然舗装のドライブコースや、遠浅の海水浴場は全国的に知られている。

会結成のいきさつ

すかんぽの会は、現在会長を務め

会の名称であるすかんぽとは、「全国保母の会」のシンボルマークとなっている花のことである。



(後列左より) 鶴田・山本(文)・山本(美)・金谷さん。(前列左より) 砂山・柴田・北山さん

る北山春江さんの呼びかけで、平成七年九月に結成された地域密着型のボランティア劇団である。

などさまざまな会があるのに、演劇の会だけがないということであった。そこで自らを中心となって声を

掛けたところ、八人の仲間が集まり九人でスタートした。みんな現役の保母さんあるいは保母さん経験者であり、北山さんと志を同じくする個性豊かなバイタリティーあふれる地元的女性たちであった。

地域の輪を広げるふれあい活動

これまでの活動は、民話や童話を脚色した寸劇を地区の老人ホームで公演したり、志雄駐在所からの依頼で町の敬老会や保育所で交通安全劇を出前公演したり、と地域住民との触れ合いの場づくりに貢献してきた。

また、介護保険制度がスタートした際には、羽咋郡遺族婦人部員ら四十人のお年寄りに対して介護保険制度という時のテーマを方言などを使って身近な問題として分かりやすくした寸劇を披露し、時にはアドリブで笑わせながら制度のしくみや高齢化社会について説明した。

劇の内容はほかにも男女共同参画や消費者トラブルをテーマにしたものを扱うなど幅広いレパートリーがあり、ファン層も同様に幅広い範囲に及んでいる。

劇の練習は月一回、志雄町にある「さくらドーム21」で行われている。ただし公演が決まると練習は週一回

となり、メンバーの顔つきも変わってくるとか。

「さくらドーム21」は十年四月に開館した学術、教養、文化、スポーツの総合拠点であり、多岐にわたって町民はもとより町外訪問者の憩いの場として大いに活用されている町営施設である。町からこの場の提供を受け、すかんぼの会は素人とは思えないレベルの高い演技力を身につけたのである。

素人が手作りで

もともとメンバーは全員演劇の経験がなく、それぞれが芝居を見に行ったり、テレビを見て研究したりと地道な努力をしており、演技指導はメンバー同士という取り組み方法。それだけに相互の信頼は厚く、演技に関して言いたいことを言い合い、少しでも地域の方々に喜んでもらえたらという気持ちで結ばれている。これこそが、まさにボランティアの原点であろう。

メンバーにはそれぞれ個性と特技を生かした役割が自然と分担され、脚本、音響、照明、絵、小道具など

すべて手作りである。

脚本に関しては、特殊な分野をテーマにした演劇を行う際には、その分野の専門の人が作成している。たとえば交通安全のテーマでは町の駐在さん、介護保険や男女共同参画のテーマでは役場の担当者が脚本の骨子を作成する。

しかし、すかんぼの会ではそれより楽しく分かりやすくするため、脚本担当の山本美津代さんを中心にメンバーで脚色し、独自の演劇に作り上げていく努力も怠らない。そのこだわりが練習においても表れ、演技に関しては厳しく、妥協を許さない本番さながらの取り組みとなっている。

取材ですかんぼの会を訪ねたのは、地域の福祉大会での公演に備えて「悪徳商法」をテーマにした四十分程度の劇を練習するためメンバー全員が集まった日だった。

初めての台詞合わせというのになさん熟練された本番さながらの白熱した演技で、息もぴったり合っていて、見ていて劇に吸い込まれるような感覚に陥った。また練習とはい

え観客や舞台を意識して、立ち位置やセットの配置を厳しくチェックし、要所所で北山さんの微が飛んだ。練習の合間にはみなさん気さくな愉快な方々なのだが、ひとたび芝居が始まると役づくりに徹し、真剣そのもので、素人とはいえ気持ちちはプロといった感じであった。

求む男性会員、若い人も

現在会員は八人で、四十代から五十代の女性ばかり。

北山さんは、現在の活動の幅を広げるためにも会員をもっと増やしたいと思っている。とくに男性の参加を強く希望している。なぜなら道具の造作に関しても家族などの協力を得てはいるが困難な面があり、また、行動範囲も限られてしまうためだ。男性にぜひとも会員になってもらいたいとのこと。

さらにこの会をできるだけ長く存続させるため若い人の入会も希望している。会員からも「このままでは、あと数十年するとおばあちゃん劇団なんて言われてしまうかも」といった冗談も飛び出していた。

すかんぼの会のメンバーに、「なぜこんなに頑張れるのか」とたずねると、「演劇が好きだから」「仲間が好きだから」そして「地域に少しでも恩返しをしたいから」。そしてな



んと言っても「見てくれる人みんなの喜ぶ顔が見たいから」と声をそろえて答えるのが印象的であった。

（地域活性化センター企画調査課 副参事 樋口 肇 監）

すかんぼの会
プロジェクト

●設立年 平成七年九月 ●運営主体 自主的組織 ●設立組織 自主的組織
●代表者 北山春江 ●会員数 八人
●事務局連絡先 石川県羽咋郡志雄町向瀬の四八番地 ☎〇七六七—二九—二四〇四

トロロ料理で 地域おこしを目指す 日常的な営業方法を模索

地元の期待大きい
体験交流館

今年の七月、新潟県川西町の仙田地区に道の駅「仙田体験交流館キラリ」がオープンした。ここでは農産物の直売のほか、民芸品作りや採れたての山の幸を調理するなどの体験イベントを実施しており、川西町と都市部との交流を図るうえで中心的役割を担う施設として、地元住民に大いに期待されている。

この体験交流館キラリの設置が決まったのは平成八年。地域住民によりこの施設を中心とした地域の活性化策が議論された。その一つの手法として、日常的に営業ができる「農家レストラン」方式で食の提供を行ったかどうか、ということになった。

そして、レストラン開設という目標に向かって、金子ヒロ子さんを中心に約二十人の主婦が集まって研究会が発足した。

農家レストランではどのような料理を提供すればよいか、勉強会を開いて検討した結果、やはり仙田地区の郷土料理を提供するのが一番いいのではないか、ということになった。

仙田地区には古くから、寒九の入から九日目にトロロを食べると脳卒中などの病気になる、という「寒九のトロロ」の言い伝えがあることから、トロロ、そして材料のジンネンジョを使った料理を提供することになった。会の名称もこれにあやかって「寒九のトロロの里食の研究会」に正式に決まり、金子さんが会

長に就任した。

新生御膳、
誕生のいきさつ

研究会のメンバーがジンネンジョを使った料理を研究していて、まず目を付けたのが粉豆腐。これはくず米を粉にして、砕いた大豆やゴマ、ニンジン、シイタケなどを入れ、つなぎに山芋を使って油で揚げたものである。ゴマ、ニンジン、シイタケなどを入れたのは、野菜を食べない子供たちのことを考えた当研究会のオリジナル。そして、この粉豆腐をメ

ーインに据え、味噌仕立てのトロロをかけた麦ご飯、四季折々の季節料理一品に汁物と漬物をそえた膳メニューを開発し、これを「寒九のトロロ御膳」と命名した。

研究会では次のステップとして、この「寒九のトロロ御膳」を地域の人たちに食べてもらうことを考えた。発足当初の勉強会で講師を務めたライフコーディネーターの田中カツイさんの協力を得て、平成十年、新潟市内に会場を借りて、寒九のトロロ御膳の試食会を兼ねた調理実習



中央が金子ヒロ子会長

会を開催した。

しかし、終了後にアンケートをとってみると、粉豆腐が菌について食べづらいなどかなり手厳しい意見が多く、寒九のトロロ御膳に対する評価は芳しくなかった。

そこで、メンバーはより一層料理



法についての研究を重ねた。そんな中、田中さんから専門家の意見も聞いたほうがよいのでは、とのアドバイスを受けたことから翌十一年、メンバーは新潟調理師専門学校に年三回通うことにした。

ここではダシの取り方や野菜の切

り方など料理の基本から、粉豆腐における粉の割合や新たな材料の選定など実践的な研究を行った。そして一年後、同校の吉田育子校長らを講師に招いた「食のフォーラム」を開催し、ここで「新生寒九のトロロ御膳」のお披露目を行った。結果は上々、参加者から高い評価を受け、メンバーは農家レストラン開設に向けて大きな自信を付けた。

仙田体験交流館キラリがオープンした現在、寒九のトロロ御膳は、土・日曜日に行われる体験イベントの参加者にとって定番メニューの一つになっている。

粉豆腐おにぎり、新メニューに

十年からは毎年一月、川西町立仙田小学校のPTAとタイアップして「寒九のトロロ学習会」を開催している。この学習会は研究会のメンバーが講師となり、「寒九のトロロ」の言い伝えを小学生に伝承するとともに、粉豆腐やトロロ汁の調理実習および会食を行うものである。近ごろの小学生は家であまりトロロ汁を食べないということで、毎年自分たちで作った味噌仕立てのトロロ汁をおいしそうにはお張る子供たちの姿が見られるそうだ。

この学習会ではオリジナルメニューの試作にも挑戦しており、新たに「粉豆腐おにぎり」などが研究会のメニューに加わった。

トロロの材料、ジネンジョは地域の特産である。しかし、生産量が少ないうえに値段が高いことから、研究会のメンバーが中心となって十一年からジネンジョ栽培を行っている。栽培を行うにあたり、県中魚沼農業改良普及センターの助成を受けてジネンジョの種や必要な器具を購入するとともに、地域の人たちと一緒に栽培の勉強会を行った。

ジネンジョ栽培は、五十センチほどの穴を掘ったところにパイプを埋め、そこに約二百本の苗を植えていくのだが、これがなかなかの重労働。毎年十数人の男性陣に手伝ってもらいなんとか頑張っている。

収益上がり、日当、時給を支給

研究会としての収益が上がるようになった今年から、手伝いの男性陣に日当を支給するようになった。

これは研究会にとって大きな意義がある。実は設立当初のメンバーの目標は、年金のほかに何か生きがいのある仕事をして収入を得ることだった。しかし実際は、イベントに参加し

て粉豆腐を作るなどの作業はすべてボランティア。メンバーは理想と現実の差を痛感したが、寒九のトロロ御膳や粉豆腐の販売が好調になるにしたがい、ようやくイベントに参加するときは少額ではあるが時給をもらうようになったのである。男性陣に対する日当支給は、このように労働に対する対価の必要性をよく知る研究会としては当然のことなのである。

研究会のメンバーが目指している目標は二つある。まず一つは「農家レストラン方式」による寒九のトロロ御膳の提供である。先にも述べたが、仙田体験交流館キラリではイベント開催時しか食の提供を行うことができない。研究会としては、日常的に食を提供できる方法がないかと現在模索中である。

そしてもう一つは、粉豆腐などの加工と販売を行う施設の確保である。現在は加工施設がないため対面販売しかできないが、施設を持つことで商品を各地に卸せるようになるのだ。

「目標はおやきで有名な長野県の『小川の庄』です」金子会長は力強く言い切った。

【地域活性化センター業務第一課 副参事 宮本明人】

初日の三十一日は、海外研修説明

会に引き続き、まちづくり現地視察として三崎港の「みさきまぐろ倶楽部」に出掛け、水揚げされるマグロによるまちおこしの実践事例を学んだ。

一日は午前中、リーダー塾主任講師である辻塚也政策研究大学院大学助教授が分権社会における行政の組織論を中心に講義、午後は小林寛道東京大学大学院教授が岐阜県御嶽高原の高地トレーニングセンターの事例を挙げながらスポーツを軸としたまちづくりの現状を説明、塾生は、観光地域産品ビデオ研修のグループ演習に取り組んだ。研修ビデオを見た後、五グループに分かれ、地域資源を活用したまちづくりの方策について検討、各グループとも熱心に議論を交わした。

翌二日は、前日のグループ演習の成果を発表した後、グリーンプロジェクト・プロデューサーの鈴木俊博講師から演習成果に対する批評と地



辻塚也主任講師の講義

全国地域リーダー養成塾



「地域経営」をテーマに 合宿 神奈川三浦市で開講 研修

(財)地域活性化センターは

全国地域リーダー養成塾

第十三期生の合宿研修を

「地域経営」をテーマに七

月三十一日から八月四日ま

で、神奈川県三浦市の(株)タ

ナベ経営湘南研修センター

で行った。

第十三期生は、北は北海

道から南は九州まで全国の

市町村、民間の地域づくり

団体などから参加している

三十五人。

今回の研修は海水浴客で

にぎわう三浦市で、合宿形

式で行った。通常の研修と

は形式を変え、四日間寝食

をともにし、交流を深めな

がら研修カリキュラムに取り

組んだ。



グループ演習

域資源を積極的に活用した観光、特産品開発についての熱気溢れる話を聞いた。また、岐阜県朝日村「氷点下の森」の主宰者である小林繁講師から冬の厳しい寒さを逆手にとつて、人工的な樹木を作り出すことにより地域の活性化に成功した実践報告を聞いた後、地域戦略研究所の新藤健一郎講師からは数多くの事例紹介と豊富な経験談を交えての「イベントをまちづくりの第一歩としてとらえることが重要」との話聞いた。

最終日の三日は、(財)東京市政調査会研究部次長の吉川富夫講師から政策、施策、事務事業と行政のあらゆる段階で客観的な評価を取り入れ、効率的な行政運営を図ろうとする行政評価に関する講義を、午後は(社福)プロップステーション理事長竹中ナミ講師を招き、チャレンジド(障害者の積極的な呼称)がコンビニユーターネットワークを駆使し、仕事を持つことによって社会参画を果たしていく経緯について説明を聞き、講義にグループ演習と内容盛りだくさんの四日間にあたる第四回集合研修を終えた。

(財)地域活性化センター研修交流課
副参事 曾田智生

地域だより

住民票交付機を図書館に 宮崎県北方町

北方町は、住民票と印鑑登録証明書を発行する自動交付機を新築した図書館のロビーに設置した。

自動交付機を利用するには町民生活課で、IC図書カードに「住民カード」の暗証番号を登録することが必要。十五歳以上ならだれでも利用できる。証明書の料金は三百円。年末年始の十二月三十日から一月二日までを除いた土、日、祝日でも交付を受けることができる。

佐藤嘉敏町長は「幅広い行政サービスが要求されており、夕方以降でも証明を受けることができる。サービス向上につながる」。県内で図書カードを兼ねたICカード使

用の証明書自動交付は初めてで、全国的にも珍しい。

炭焼き伝承で愛好会 栃木県高根沢町

高根沢町は、化石燃料の普及で炭の使用が減少していることから、日本古来の炭焼きの技術を伝承・普及させるため「炭焼き愛好会」をこのほど設立した。

会員は、町が応募した①炭を焼いてみたい人②炭の持つ効果に興味のある人③で、役場職員を含め二十四人。製造するのは、一般に使われる黒炭。かまの火入れから、まき割り、かまの温度管理などの作業工程で、製品化まで四日間かかる。また炭焼きの副産物である木酢液の精製も行う。

町はこのため約七百万円の小型かまを購入した。町農政課では、「指導者は、炭焼きを経験したことのない地元の人だが、炭に興味を持ち、独学で取り組んだ人をお願いした」。

旧町名使用してタウンミーティング 仙台市

仙台市は、藩政時代から伝わる旧町名を道路の通称名な

どに活用するため、地域住民から意見を聞くタウンミーティングを行っている。

これは歴史的町名等活用推進委員会がこの三月に提言したことに基づくもの。

ミーティングは、旧城下を小学校区を単位に①立町②北六・上杉山通③片平丁④榴岡・東六など八地区に分けて十一月下旬まで開催。地元住民からアイデアを出しても良かったり、まちづくりの素材にする。

市では、これら意見を道路の通称名だけでなく、バス停、建物の名称、表示板作製、イベント開催、地図作製などに幅広く活用していく方針だ。

英国に現地センター 岩手県東和町

東和町は、高校生の留学を通じて交流を深めている英国シェトランド諸島の北大西洋

水産大学の構内に、町をはじめ日本の文化や生活などを紹介する「東和センター」を開設した。

同諸島は、英国本土から北へ約百六十*に位置し、百以上の島からなる。同島との交流は今から十二年前、岩手県花巻市在住の中野清一・日本チエコスロバキア協会岩手支部長から、日本に交流先を求めていた地元高校教師を紹介されたのがきっかけ。

展示品は、田瀬湖のあやめ、土沢のまつりなど町のイベントを紹介したパネル、たこ、こけし、けん玉、ちやぐちやぐ馬などの民芸品さらに、わらそうり、うちわ、会席膳といった生活用品など計百五十点。

ワイン用ブドウのオーナー募集 北海道小平町

小平町は、町の特産物としてワイン用ブドウを売り出すとともに、産業経済の活性化を図るため、ブドウのオーナーを募集している。

ブドウ畑は営林署の苗畑の跡地を利用し、一口一万円を出資すれば平成十八年度から

五年間、製造された赤、白、ロゼのワイン（七百二十ミリリットル）三本セットを届ける。

町では気候がブドウ栽培に適していることから、今年度赤白ワイン用のセイベル種三千本、白用のバックス種一千本を植栽。十五年度までに計一万二千本植える予定。

申し込みは道内はもとより九州まで全国各地からすでに一千口以上あり、経済課では「PR効果もあつてか予想以上の反響」とのこと。一人何口でも可能だが先着四千口まで。

SL42年ぶりに運行 土讃線高知―土佐山田間

JR四国は、SL列車を土讃線の高知―土佐山田間（一五・三キ）に十一月二十三日から三日間運行する。同線でSL列車が走るのは昭和三十四年以來、実に四十二年ぶり。

今年が高知城築城四百年にあたり、四国再発見キャンペーン・イベントの一環。一日三往復で、定員百八十人。これに合わせ沿線の三市町は記念イベントを実施する。



センタースタッフ 通信

◆ ぶらざサロンで 研修交流会

（財）地域活性化センターが運営する、ふるさと情報プラザ主催の第六回ぶらざサロンが、八月十日、東京・有楽町の日本外国特派員協会メデイアルームで開催され約八十人が参加した。当サロンは自治体の東京事務所職員を主な対象に年一回開催する研修交流会で、毎回個性的なまちづくりのヒントとなるテーマを取り上げている。

今回は「わが町の魅力を再発見する」と題し、路上観察学会の有力メンバーである、松田哲夫（筑摩書房専務）、南仲坊（イラストライター）、林丈二（デザイナー）の各氏と自治体での実践家である山形県職員野口千秋氏の計四人



が、路上観察の手法と実例についてスライド映写を交えながら解説し、その後、パネルディスカッションを行った。

● 首長来訪

▼兵庫県 井戸敏三知事
（8月29日）

笑顔がいちばん！ 放送予定

● 10月7日
山形県川西町、東根市
みちのく、やんちゃ留学

● 10月14日
大阪府八尾市、吹田市
歴史と町並みに息づく街

● 10月21日
千葉県千葉市、佐倉市
親子三代夏祭り

● 10月28日
秋田県六郷町、小坂町
清水と森と散歩道

TBS系、毎週日曜日
午前7時～午前7時30分
※一部で放送日時が異なる地域があります。

地域産品・観光おこし研修会

お知らせ

（財）地域活性化センターと（社）日本観光協会は共催で、「地域産品・観光おこし研修会」を開催します。

この研修会は、地域の人びとが自らの地域の有形・無形の資源や特性を把握し、新たな観光地や地域特産品としてアピールしていくための着眼点や手法などを、講演やグループ演習を通じて習得していただくことを目的としています。各地で、物産・観光振興に携わっておられる方々の積極的な参加をお待ちしております。

● 日程・会場

九州会場：平成13年11月8日（休）～9日（金）
福岡市・ソラリア西鉄ホテル

● 研修内容

講演「21世紀型の新しい観光の潮流はこれだ！」

講師＝小林英俊氏（財）日本交通公社観光マーケティング部長
グループ演習「地域特産品が観光を変える」

講師＝須川一幸氏（林）地域振興研究所代表取締役

熊本県白水村を事例地として設定し、その地域の物産・観光振興の方法についてグループ演習をしていただきます。

● 募集人員＝100人（先着順）

● 申込期限＝平成13年10月12日（金）

● 参加費用＝7,000円（研修費、昼食代および交流会費）

＜お問い合わせ先＞

（財）地域活性化センター 業務第2課
担当：畑尻・大野 ☎ 03-5202-6137

地域イベントおこし 出前研修会

お知らせ

（財）地域活性化センターでは、地域おこしに関してやる気のある方々を対象に、毎年東京で開催している「地域イベント実務研修会」の「地元版」出前研修会「地域イベントおこし研修会」を実施します。この出前研修会では、地域イベント実務研修会のカリキュラム一式を皆さまのご希望の日程および会場に合わせ開催することができます。

＜研修会の内容＞日程・スケジュール案（標準）

● 1日目

13：00～地域視察調査（講師、研修生および事務局による自然環境、歴史、産業などの地域資源の掘り起こし）

● 2日目

9：00～9：30 受付
9：30～9：45 開講式
9：45～12：00 講義
12：00～13：00 昼食
13：00～17：30 講義
グループワーク
18：00～ 語ろう会

● 3日目

9：00～12：00 グループワーク
12：00～13：00 昼食
13：00～14：30 グループワーク
14：30～16：30 発表・講評
質疑応答
16：30～17：00 閉講式

＜委託料＞

会場借り上げ料など研修会運営にかかる費用、研修生募集のための通信運搬費など並びに地域の視察調査にかかる旅費交通費などは、主催者側の負担となります。

また、講師派遣のための旅費（1日目の日当を含む）・宿泊費の全額および講師謝金の半額についても、主催者側の負担となります。

なお、主催者側の負担はおよそ26万円となります。

＜お問い合わせ先＞

（財）地域活性化センター 業務第1課
担当：宮本・村杉 ☎ 03-5202-6136



© 1999 AWAGOC

2003 第5回 アジア冬季競技大会 青森2003 AOMORI



ウィン太
だよ

© 1999 AWAGOC ®

マスコットキャラクター ウィン太

大会期間 2003年2月1日(土)~8日(土)

開催地

青森市

八戸市

三沢市

津軽市

弘前市

大館市

競技種目

フィギュアスケート
カーリング

スピードスケート
アイスホッケー(男子)

ショートトラックスピードスケート
アイスホッケー(女子)

スノーボード
フリースタイルスキー

バレーボール

アルペンスキー
クロスカントリースキー
ジャンプ

(財) 青森アジア冬季競技大会組織委員会



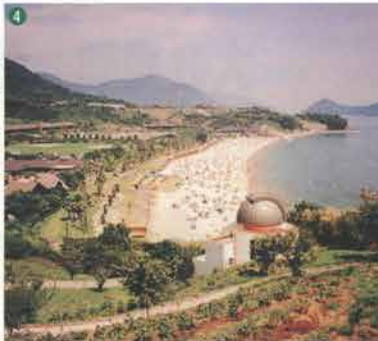
都市と農村の 交流による 二十一世紀型 農業の実践

瀬戸内海に浮かぶ大小九つの島からなる蒲刈町は、日本の渚百選・日本の水浴場八十八選に選ばれた「県民の浜」をはじめとする多くの観光資源を有し、四季を通じて県内外から大勢の人ひとが訪れるリゾートアイランドです。平成十二年一月には安芸灘大橋が開通し、本土との陸上交通が確保され、ますます町外との交流が盛んになっています。

本町では、古くからかんきつ類の栽培が盛んで基幹産業の一つでしたが、輸入自由化の影響などから不振が続き、また、後継者不足も顕在化するなど、農業活性化への対応が迫られていました。

町では、「県民の浜」に近接した丘陵地に都市と農村の交流を通じた二十一世紀型農業の実践を目指す農業体験・研修施設として「恵みの丘」を整備しました。

「恵みの丘」では、現在三人の研修生が蒲刈町での就農を目指して新たな生産技術の開発や農業経営の習得に汗を流しています。また、研修生が丹精込めて栽培したかんきつ類やイチゴの収穫などのさまざまな農業体験が楽しめます。



①町での就農を目指す農業研修生 ②農業体験・研修施設「恵みの丘」 ③ミカン狩り ④県民の浜

10月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

10月1日～3日
高山市（岐阜県）

10月17日～18日
県南地域地場産業振興対策協議
会（福島県）

10月23日～25日
五泉市（新潟県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

10月1日～5日
京都府

10月15日～19日
佐賀県

10月29日～11月2日
函館市（北海道）



8月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

8月20日
茨城県関城町
特産物キャンペーン①

8月30日～31日
木曽御嶽観光連盟（長野県）
木曽御嶽山秋まつり②

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

8月6日～10日
茨城県石岡市
石岡のおまつり③

■編集後記

▼今回は「動物・生き物によるまちづくり」を取り上げた。

昆虫、メダカといったわれわれの身近なところに生息するものがあれば、タンチョウ、トキなど特定の場所に限定されるものもある。

ひところ減少していたホタルだが、最近各地で飛び交う光景を見ることができるようになった。ある自治体の担当者は「乱開発の反省と環境重視の表れでは」と説明してくれた。「ホタルは環境を知るバロメーター」ともいわれる。高校まで田舎暮らしをしていた編集子は庭先で初夏の「風物誌」を楽しんだことを思い起こす。川と緑あるところ、どこでもホタル狩りができる日が来るのを願ってやまない。

▼自治体が首都圏の活動拠点にしている東京事務所、市の場合、昨年は四カ所閉鎖した。今年二カ所開設して計六十八になった。「最近横ばいか減少傾向（某市所長）だ。「不況で企業誘致が難しい」「経費節減」「東京情報はインターネットで得られる」が撤退の理由。だが、人脈づくりには果たす役割は大きい。将来の「財産」になるだけに東京事務所の在り方に特別の配慮も必要では……」（やなぎ）

特集リーディングを生かすまちづくり

地域づくり 10月号

平成13年10月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131（代） <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

夢、
G
e
t
!!

数字選択式宝くじが止まらぬ。



二科展デザイン部 入選作品
榛澤 照生

富士銀行のATMにて、数字選択式宝くじが購入できます。ただし、購入するにはその銀行のキャッシュカードを保有していることが必要で、また一部店舗および機種によりお取り扱いできない場合があります。詳しくは、当該金融機関にご照会下さい。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は(財)日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。